

CUCKOO LAND

春卷

* ナンセンスな申し開き

美咲へ

唐突だが、我々は島へ行く。

何か具体的な所用が島にあるわけではない。ふらつと浮ついた気分で島へ遊びに行くのでもない。上手い表現がどうにも見つからないのだが、ともかく今の我々は島に行かざるを得ないような気がしてならないでいる。必要なのだ。必要だから島に行くのだ。乾いた体が水を欲するように、思慮の余地なく。

あるいは今の我々は、島のなものに飢えてすっかり気が触れているのかもしれない。そんな気がする。で、もしそうだと、「島のなもの」が何を指すのか、我々とどう関わりがあるのか、そんなことは皆目分らないし、実は見た目ほど肝心な要点でもない。自分が身も心も島を求めているのが確かに実感できる——それだけで十分なのだ。島のことを考えるだけで、我々は正気になれるような予感がする。思考の道筋を覆うどす黒い霧が晴れ渡り、まるで自分で自分をしっかりと保て

るようになる気がするのだ。

それが島へ行く理由だ。

断つておくが、「用事があるから」というのを理由であると見なすのは、正確な考えでは少しもない。用事がないから何かをする理由もない、という考えもだ。そこにはごまかしの臭いが強く漂っている。なぜなら、用事を無視できないと考えるあなたの恣意的な判断が、そう、ドグマにうんと近いものが、あなたを時にやっかいな用事の解決に尽力させる本当の理由なのだから。あなたは本当は、用事を自由に無視できる。

しかし一方で用事というやつは、自分の思いとは無関係にうごめく見えない触手のようなもので、あなたに帰属しながら、触手が何を絡め取ってくるのか、あなたにはどうにもならない（それをあなたは「意志」と呼ぶかもしれない）。そして、絡め取られた諸々の用事を、それは無視できるという自覚を欠いたまま「理由」として処遇したが最後、理由はあなたにまとりついて決して離れようとはしない（それをあなたは「責任」と呼ぶだろう）。そういった論理的飛躍の所産である「理由」の数々は、あなたをずっと支え、健康的な活力を与え続けている。用事と理由の間には断絶があり、あなたがそれを埋めることで、初めて両者は同一視できるようになっているのだ。あなたはその作業に長けているし、それに依存しているようにも感じる。

このように、用事は理由にはあたらないし、矯正措置の介在なしに同じにはなり得ない。本来別

物なのだ。我々はそう考える。だから冷たいようだが、あなたは置いていくことにする。我々はそのようにしてはできていないのだ。理解してほしい。

そして、理由とはある目的に従属する形でのみ存在するのではない、ということも言っておかないといけない。何にも従属することなく、無目的で理由しかない場合もあるのだ。

この言い回しを見てあなたは変に思うかもしれない。目的がないのに何かをするなんて、ただの空しい徒勞でしかない、と。だが、それは子供にとっては常識中の常識だ——僕は遊びに行く、なぜなら僕は遊びなくてはならないから。片や我々はいえ、島に行く、なぜなら我々は島に行かなくてはならないから。我々の感情を素直にゆえると、このように子供と全く同じロジックになる。そして、ドグマは原理的に嘘をつけないし、計算高い目的も持てない。

理由になつていないよ、ただの同語反復だよ、とあなたは冷笑するかもしれない。冷笑、大いに結構。しかしあなたは我々の身勝手を怒ったりする必要まではない。安心してほしい。我々は今の生活を捨てて荒涼とした孤島に永住する気などさらさらないし、そんな度胸も知恵も根性も持ち合わせていないことくらい、自分でも重々分かつている。我々はただ、職場や学校の誰にも迷惑や心配をかけることなく、しつかりとした集落のある世俗的で平穏な島に、ほんの十日かそこら行くこととしていただけなのだ。それ以上となると、私は親を危篤に仕立て上げるか、さもなければ会社を休職しなければならなくなる。

と、色々書いてはみたが、確かに、外在的で腑に落ちるもつともな（いわゆる「客観的な」）理由を示すことはこの場合、なかなか困難を感じてしまう。島のことは我々の外側から見ればある意味衝動めいた類の振る舞いしか見え、前置きの分からない衝動とは多くの場合、内在的な要素に起因するものだからだ。そして、そう見えてしまうことに対する反論の材料を我々はどこにも見つけられない。とどのつまり、我々は自分達のことを客観的に何も分かっていないのだ。何一つ、そう、確かに他人への説明に窮するのは不便ではある。だが、その一点を面倒だとは思いつつも、我々は自分達を客観的に理解しようなどとは少しも感じてなんかいない。そんな空しいことに時間を費やすよりは、島のことを夢想する方が、今の我々には遙かに有益なことだからだ。

長くなってしまったので、もう少しで話を終わらせたい。

香港島でもない限り、島へ行くには一般に面倒で時間がかかるものだ。海の天気は変わりやすく、船やセスナ機は時刻表通りにはなかなか出発しないし、気まぐれに波が高くなったり風が強くなったり有無を言わず即欠航で足止めだ。そして島の住人やその親族でない限り、大抵の人は、仕事や遠足といった何か不可抗力が生じたか、あるいは観光という目的を達するためでなければ、普通

わざわざ島などへ行くことはしない。当たり前だ。それはやむを得ぬ理由がなければ誰も税務署に行かないのと同じレベルの話だからだ。だから、まるで意味もなく税務署に行くような我々の振る舞いが、合理的なあなたにはとても理解しがたいのは我々にもよく分かる。

そこで、あなたの感じる不可解さを和らげるちよつと分かりやすい例を挙げてみたい。たとえば、あなたには好きな色があり、仮にその色をここでは赤色としておく。もし赤色が嫌いなら青色や黄色に置き換えて次の段落を読んでほしい。

あなたは赤色が好きだ。そしてこれは疑いのない真実だ。しかし、赤色が好き、というあなたの中の真実にどれだけの理由を後付けしたとしても、赤色が好きな理由が言い尽くされることは決してない。そもそもそれはどんなに頑張っても無駄骨に終わる宿命にある。赤色が好きと明言した時点で全ての言うべきことは既に言い尽くされてしまっているからだ。どうして赤色が好きなの？、という問いに答えはどこにもない。そこはロゴスの終点なのだ。

つまりはそういうことだ。あなたは赤色が好き、そして、我々は島へ行く。

我々に悪いところなどどこにもないはずなのだが、どうしてもだか申し開きをしたい気分になつてしまい、このような文章をあなたに記した次第だ。

詭弁の数珠つなぎに気を悪くしたかもしれない。しかし我々は人に嫌われることには慣れている。

無視されることも、見捨てられることも。

追伸

もちろん、同行する三善君に無理強いするつもりは毛頭ない。彼が帰りたくなったらさっさと切り上げるつもりだ。私もそれくらいは大人なのでどうかご心配なく。

甘利

* 三善君との出会い

我々は今、とある下町に男二人で暮らしている。ゲイカップルではないが、じゃあ何なのかと言われると返事に困ってしまう。一番近い答えといえは里親と里子の関係なのだが、私はその呼び名に少々抵抗がある。二人の間には別にしがらみはないからだ。

下町の賃貸は家賃が意外に高いのだが、その分は物価の安さで相殺されて余りある。私が下町に住んでいるのは、その地に根の生えた老人が多いからだ。私は杖をつく老人の、しわだらけの顔がほころぶを見るのが好きなのだ。

元々私は1Kのうらぶれた部屋で苦学生のような質素極まりない一人暮らしをしていた。そして、暮らしぶりのストイックさに悦にふけったりして、少々屈折気味ながらその小さな生活を楽しんでいた。しかし、そこへ突如十四歳の三善君が転がり込んでくることになり、生活不能なほど手狭になってしまったので、私は急いで近所で広い部屋を探した。その結果、今の新婚さん向けの2LDKのマンションに引っ越して今に至っている。

2LDKの各部屋は、私の部屋と、三善君の部屋と、そしてリビングという名の食堂・テレビ部

屋という割り振りで使っている。テレビは引越後何となく購入したものだ。なんで自分はテレビなんか買ってしまったのだろうと当初は自分でも不思議に思っていたのだが、その理由が分かったのは買ってしばらく経ってからだった。二人の間[※]を持たせるのに、テレビはとても有用だったのだ。

2LDKにした理由は、個室があれば、三善君は安心して自分の部屋でオナニーができると思っただからだ。自分も彼ぐらいの年頃には、暇さえあればオナニーしていた記憶がある。しかし実際の効用はそれだけではなく、個室が安全弁のように働いてくれるおかげで、我々はいつでも平穩に暮らしている。

そんな共同生活が始まったのは、今からちょうど二年前のことだ。

私の仕事は朝が早い。ただし通勤は逆方向なので座れて楽だ。

私はずっと、千葉のはずれにある巨大な集配センターで働いている。ちなみに正社員だ。そこで、Jブロックのマネージャーをやっている。ブロックは地域毎にAからNまであり、各ブロックあたりだいたい二〇人程度の職員が働いている。

各ブロックの職員のうち正社員はごく僅か、せいぜい一人か二人に過ぎない。メインとなる正社員以外の職員は、協力会社の人と派遣の人が半々と、何人かのパート、アルバイト、そしてタフな

知的障害者一名で構成される。お歳暮時期など繁忙期には二〇人程度の臨時アルバイトが別途加わる。

各ブロックの仕事内容は、全国から集まってくる東京近郊向けの膨大な宅配便を、外から検品し、地区コード毎に仕分けし、そしてひっきりなしにやってくる集荷の車へ荷物を詰め込むことだ。遅延や破損は許されない。

そしてマネージャーの私の仕事はと言うと、職員への指示、集荷の車のスケジュール調整、職員のシフトの調整、トラブル対応、協力会社や派遣会社との値段の交渉、面接と評価と解雇通告、同僚の悩み相談、暇な上司の相手など、とにかく雑多なこと全てだ。色んな雑事がいつも同時並行でランダムに進み、慌ただしいことこの上ない。

と、このようなとりとめのない職務内容ではあるが、私は今の仕事に満足している。なんといつでも正社員だからだ。同僚達の不安定な雇用形態と将来設計の不可能な境遇を目の当たりにしていると、何だか自分ばかりがいい思いをしているようで申し訳なく思ってしまう。そして彼らもまた、絶対に口には出さないが、私の不公平に安定した身分をさぞや嫉んでいることだろう。嫉まれて当然だ。

それでも我々は朝には一緒にラジオ体操をし、円陣を組んで輪を解くと、力を合わせて一緒に汗をかく。矛盾に満ちた一体感が脆くも崩れてしまわないよう、常に注意を払いながら、わざとらし

い笑顔を振りまいて。そうするより仕方がないのだ。

私が職場から帰る途中には、銀座や新橋、有楽町などの歓楽街がある。一人暮らしのサラリーマンだった頃（といつても二十年近くになるが）はよく有楽町で腹にもものを入れ、銀座をぶらぶら散歩したものだ。特に春は気持ちがいい。そして三善君と初めて出会った時も春、桜が散った頃だったような気がする。

有楽町と銀座が交わるところに、雑居ビルのような教会がある。その外でうずくまっている身元の汚れた若者の姿が、ほろ酔い加減で歩いている私の目にとまった。

私は彼に近寄って「お前、大丈夫か?」、「泊まる場所はありますか?」などと声をかけたように記憶している。すると彼は顔を上げて私を見上げると、何も言わずにただ笑ったのだが、その顔には疲れた様子が色濃く出ていた。私は、何だ、まだあどけない少年じゃないか、と驚きつつも、ここは教会だ、神父さんか誰かが何とかしてくれるだろうと思ひ、「大丈夫そうだな、じゃあな」と声をかけてその場を立ち去った。

しかし翌日、どうにも気になつて仕事帰りに同じ場所へ行つてみると、案の定、少年は同じ場所ですでなくまっていた。「おい君」と呼んでみたが、顔を上げるのも難儀そうな衰弱ぶりだった。私はたまたま「お前、俺んどこ来い」と少年の手をぐいと引つ張り、タクシーを拾つて1Kの自宅ま

で連れて帰った。その間、少年は人形のようにされるがままだった。

私が行き倒れの少年を助けたのは、間違つても博愛精神からではなく、単純な、とても単純な苛立たしきからだだった。皆が疑心暗鬼で腹黒くなっている職場の複雑な人間関係から生まれる、押さえつけられた日々のはけ口に、この少年はされただけだったのだ。

これが私と三善君の出会いだった。

* 吃音

タクシーの中では無言だった。年長者の私がかけるべきだったのかもしれないが、私はとてもそんな気にはなれなかった。この少年、家出なのか追い出されたのか、まあその両方なのだろうとは思ったが、いくつなのか？、どこから来たのか？、といった通り一遍のことを尋ねても、少年にはそんなうつろな言葉、耳になんか入らないに決まっている。

あの時点では、どんな言葉も少年にはうわの空だっただろうし、言葉の意味がすっかり抜け落ちて何も頭に届かなかつただろう。全くの無抵抗で知らないおっさんについてくるくらいだ、心のがらんどろ加減と神経の憔悴ぶり、考えることを放棄した態度と放心がかろうじて遠景に追いやって

いる絶望感は、少年が何も言わなくても十分すぎるくらいに分かった。

タクシーを途中でコンビニに寄らせて、私は少年のための下着を何セットか買ってきた。少年の身なりからして、今はいている下着はあまり想像したくない状態になっている可能性大だと思っただからだ。

タクシーがアパートの前に停まると、私は「恐ろしく狭い部屋だが我慢しろよ」と言った。少年は、ありがとうございます、と言おうとしたのかもしれないが、

「あ、あり……」

と、うまく言葉が出せなかった。この時私は少年の声を初めて聞いた。声変わりしたての、幼さを残した甘く細い声だった。私は苦笑すると、「まずは風呂に入って着替えな、その後で何か食いにしよう」と言った。少年は頬笑み返して口を開いたが、やはりひどくどもって、ありがとうございます、とは言えなかった。

我々は1Kの狭い部屋に入ると、私は少年を風呂場に追いやった。

私は窓を開け、冷蔵庫からコーラを一本とサラミを取り出すと、ベッドの端に座って一息ついた。甘いコーラは疲れた体を少しだけ蘇らせてくれる。しかし普通のおっさんならビールだろう。私も嫌いではないのだが、あまり酒が飲めないのだ。ショットバーで一口すすればもうそれで十分なのだ。缶ビールは私には多すぎる。

さて、今日もよく働いた。妙な拾いものもした。明日は土曜日、火水の休みまではまだまだだな——そうひとりごとと、私は思い切り大あくびをして、ベッドに身を任せた。

そうしてベッドでしばらく横になっていると、ひどく汗臭い不快な臭いが漂ってきた。犯人は探すまでもなかったが、起き上がって玄関辺りに行くと、少年が脱いだ衣類からもナップサックからも靴からも、同じ攻撃的な臭いが放出されていた。それはタクシーの中でも少し感じたが、長時間置きっぱなしの部屋の中では、そのすえた臭いがいつそう濃く充満してしまっていた。私はもう大好きなサラミを口にする気分にはとてもなれなかった。私は臭いの元を換気扇の下にまとめ、換気扇を回した。

一人きりで臭いを我慢する時間はとても長く感じた。そしてようやく少年が体を洗い終え、コンビニで買った真新しい下着姿で風呂場から出てくると、私は少年の前でナップサックを右手に持って、「洗濯機が受け付けるものは何でも放り込んでくれ」と少年に言った。少年は恥ずかしいそうに頷いた。

結局、メモ帳とペンケースと小さな小物袋の他は全て洗濯機行きとなった。ナップサック自体も洗濯機行きだ。

洗濯物を詰め込み、洗剤を入れ、スタートボタンを押す。と同時に洗濯槽へお湯が注がれ、やがて洗濯槽が回り始める。すると、数回回っただけで透明な水はたちまちどぶ色に変わった。我々は

あぜんとし、顔を見合わせて笑った。

「名前を聞いてなかった」と私は少年に言った。「私の名前は甘利、甘い利益と書いて甘利という。悪徳政治家のような名前だ。自分ではちよつと気に入っている。下の名前は銚介けいすけ。こいつはちと字が難しい」そう言うと、私は手帳を取り出し、銚介、と書いた。「で、君の名前は？」

すると少年は、

「みよしおつひこ」

と淀みなく言い、自分のメモ帳に「三善乙彦」と書いて見せた。丁寧でバランスのよい、ペン字教室の見本のような字だった。

「なんだ、ちゃんとしやべれるんじゃないか」と私が言うと、三善君は顔を背けて照れ笑いをしながら、「あ、あいあ」と言葉にならない音を口から出した。そこで私は、決まり切った言葉以外は上手くしゃべれないんだな、と推測した。言語障害なのか極度のどもりなのかは素人には判断しかねたが、そんな区分けはまあ些末なことだ。

「まあ飲め」と私は風呂上がりの三好君にコーラを渡した。三好君は「ありーとー」と言つて大事そうにちびちびと飲んだ。

「よけた小物袋の中に、本人確認できるものはあるかい？」と私は尋ねた。今の世の中、身分不詳では生きにくいし、この子がどんな子なのか、下世話な興味もあつた。三善君は首を横に振つて小

物袋の中を見せてくれた。中には財布と、宝石の原石がいくつか、アンモナイトの化石、どこかの神社の御守り——それだけしか入ってなかった。

洗濯機は最初の脱水を終え、一回目のすすぎを始めた。私はコーラ片手に見に行くと、水は灰色に濁り、透明度はゼロだった。こりや二回回した方がいいかもな、と私は呟いた。それを見ていた三善君は、「すん、すん」と言いながら、すまなそうに頭を何度も下げた。

「どうせ何日もろくに食ってないんだろう」と私が言うと、三善君は「はい」と淀みない返事をした。私は、ずつと空っぽだった胃袋には重湯つて言うよな、と思つたので、メニューに粥のある中国料理店に行くことにした。ちよつと離れているので行きも帰りもタクシーになる。一日に三回もタクシーに乗るのは生まれて初めてかもしれない。

幸い三善君の体格は私より若干小柄で細めな程度だったので、私の服を適当に貸して着てもらつた。しかし、自分の服を他人が着ているのを見るといふのは妙な気分がした。

大通りに出てタクシーを拾うと、我々は下町の端の、中小企業のオフィス街に店を構える中国料理店へ向かった。そこは込み入った説明しづらい場所にあるのだが、幸いタクシーにはカーナビが付いていたので、店の名前を伝えるだけで私の用は済んだ。店名を天津飯店というのだが、メニューに天津飯がない、ちよつとこだわりのある店だ。恐らく店主が天津出身で、その天津には天津飯なるものはないから当然メニューには載せていない、といったところだろう。

この店には日本人におもねったところが少しもない。そして、おもねらない店の料理は一般に、素直で正直な優しい味がするものだ。ここの粥は食べたことがないが、それもきつと期待を裏切ったりはしないだろう。

店内は空いていた。我々は四人がけの小さな丸テーブルに案内されて椅子に座ると、一緒にジャスミン茶をすすった。そして私だけがメニューを開くと、私一人が勝手に二人分の注文をした。三善君の分は、メニューの粥の欄の一番上に載っていたのが「八宝粥」という名の料理だったので、どんなものかさっぱり分からなかったが、迷わずそれにした。メニューの一番上に載っている料理は、大概その店で一番おいしい料理に決まっているものだからだ。私は牛肉のあんかけご飯にした。それと小品を少々。

三善君は見るからに緊張していた。混乱しているのだろう。私は「まあ好きなだけ食ってくれ、でも今は胃が壊れやすくなっているから、気をつけながら無理せずにな」と私は気安い口調で言ってみた。見る限り、三善君の緊張は少しもほぐれなかった。

ピータンと豆腐、クラゲの酢和え、豚の耳、サーピスのザーサイと卵スープがすぐに来た。私は「食うか？」と三善君に尋ねると、彼は小さく頷いて、少しずつ遠慮がちに小皿に取り分けた。ただし豚の耳には手をつけなかった。

我々が冷菜を黙々と食べていると、しばらくして小籠包が来た。竹の蓋を開けると五個入りだっ

た。小籠包は中のつゆが肝なので、二つに分けるわけにはいかない。なので「二個か三個か、じゃんけんで決めよう」と私は言った。すると三善君は「どー、どー」と言いながら、両手でどうぞどうぞとうぞと私が食べるように勧めたのだが「いや、ここは公平にじゃんけんだ」と私は言い張つて、無理矢理じゃんけんに持ち込んだ。

そして三善君が勝った。私は、よかつたよかつた、と優しい気持ちになった。そして取り皿に小籠包を三個のせ、三善君に渡した。「ほらよ」三善君は、本当にいいんですか、とでも言いたげな表情をして恐る恐る受け取った。

「たかが小籠包一個だろ」と私は笑いながらも、ちよつとびくびくしすぎじゃないか、と三善君の言動を訝った。一般家庭のことなど私にはさっぱり分からないが、こりや家庭に相当問題があるんじゃないのか、と私は勘ぐった。

三善君のことを彼の両親に知らせるべきかどうかについてはずっと考えていた。もちろん彼の親が普通の親なら、今頃おろおろと心配しているはずだろうから、すぐにでも教えてあげなくては可哀想だと素直に思う。

しかし三善君の場合はどうだろう？ これも根拠のないただの勘だが、彼の親はどうも普通の親ではないような気がする。ここは三善君が落ち着くのを待つて、伝えるか否か、彼自身に判断してもらうのが本人のためか、と思つたりもする。でも彼はまだ子供だしな、正しい判断ができるかな、

とためらいがないこともない。

しかし、そういうことは時間がいずれ解決してくれるだろう。その間の、それにまつわるごちゃごちゃとした社会的責任とやらは私が全面的に負っても構わないと思う。なぜそんな気持ちになれるのか、自分でも実は不思議でならない。それに、もし警察沙汰になったとしても、事情を話せば会社もクビになりはしないだろう。……甘いだろうか？

前菜を食べ終えてから間を置かずに、メインの料理がどんと出て来た。私のはいつ見てもあんがつやつやして美味そうなあんかけだったが、三善君のはあずき色をした溶岩のような、あまり美味そうには見えないしろものだった。しかも大量。

だが、三善君は美味そうに食べた。若者らしくガツガツと、粥を胃の中へ掃除機のように吸い込んでいった。時折ザーサイをつまみ、また粥に没頭する。「そんなに美味しいのか？」と私も小皿で少しもらったが、そこには見た目のおどろおどろしさとは対照的な、薄味の中に芳香の漂う、菜膳のような高貴な風味と味わいがあった。確かにこれならいくらでも食べられる。

帰りのタクシーの中で、三善君はすぐに眠ってしまった。無防備な寝顔だった。私も一眠りしようとしたが、彼の今後をどうするかがどうしても頭から離れなかった。肝心なことは苛つくほど何も分からない。私は眠りに就いた下町の、暗くて殺風景な風景を窓からぼんやりと眺めていた。

私はどこまで無力なのだろうか。

* 十四歳の初仕事

部屋に着いてから「そういえば歳も聞いてなかったな」と私は三善君に言った。すると三善君は唾をぐくりと飲んで一呼吸つくと「十四歳」と流暢に答えた。そしてなぜか肩を怒らせてまるで何かに身構えるような緊迫した様子になった。

しかし私はそんな彼をよそに、ベッドの端にすくと座ると「十四かあ」とため息を漏らした。そして「十四じゃあ義務教育期間じゃないか、まずいよなあ」と口から不安が突いて出た。私は力む彼の方を向き「三善君、学校はどうしてんの？」と訊いた。すると彼は怒ったような表情で、黙って首を横に振った。

「しばらく行つてないんだね？」と今度は優しく言ってみると、彼はゆっくり首を縦に振った。私は続けざまに尋ねた。「じゃあ、学校は自主的に休んでいるのか、それともやむを得ぬ事情があつて休んでいるのか、どっちなのかな？」もちろん答えは期待してなかった。もののはずみで言ってみただけだ。

が、彼は俯いてしばらくぶつぶつ小声で何か言葉らしき音を繰り返して（後で分かったが、それは発話練習だった）、そして顔を上げてこつちを見ると、

「あなたに迷惑は、かからない、安心だ」

と、たどたどしい言葉で言った。彼が文章を話すのを聞くのはこれが初めてだった。

「安心？ どうしてかな？ 君はまだ色んな義務としがらみの配下にいらなくてはいけない身分なんだし、私はそんな君を勝手に部屋に連れ込んでいるんだよ。他人が見たら誘拐にしか見えないんだよ」

「嫌」

「嫌？ 嫌って、理由を話すのが？」

彼は頷いた。顔面が紅潮して、とても興奮している。

「許せ許せ。君の言う安心、心から信じようじゃないか、うん、信じる」

私は立ち上がると、洗濯カゴに洗濯物を入れた。

そして我々は洗濯物をベランダへ一緒に干した。その中に、銀座に着ていけるような服は一着もなかった。

翌朝の六時、私は自分の職場へ三善君を連れて行った。独房のようなこの狭い部屋に、子供を

たった一人で一日置き去りにするのはいかなものか、と思ったからだ。三善君のことは十五歳の見習いバイト、ということにしておくことにした。今日という日は、自在にでまかせができるマネージャーという地位を、初めてありがたく思った日かもしれない。

我々は一時間かけて職場の最寄り駅に着き、そのバス乗り場から、会社貸し切りの、職場までの直行バスに乗った。

「簡単な仕事しかやらせない。みんないい連中だ。安心しろ」

そしてバスに三十分ほど揺られると、田んぼの広がるその向こうに、異様に巨大なコンクリートの建築物が見えてくる。そこが配送センターだ。

やがてバスは配送センターの中へ入り、Aブロックから順に停まっていく。そしてしばらくするとバスはJブロックに到着し、そこで我々は降りた。両側面と正面の大きなコンクリートの壁には、十メートルほどの大きさで、でかかどと橙色で「J」の文字が描かれている。誰が見ても馬鹿馬鹿しいほどにJブロックだ。しかもこの「J」、夜は光を反射して輝くとくる。

そこへバスは続けざまに何台か停まり、たちまちJブロックの職員が全員揃った。

私は余っている作業着を三善君に渡し、ブロックの隅で一緒に着替えた。着替え終えると、三善君の緊張もだいぶ解けたように映った。

仕事だ。

朝のラジオ体操は、若手三人が前に出て見本を見せながら行われる。普通のラジオ体操とは違う、会社オリジナルのものだ。ラジオ電波で流れているわけではないのだが、みんなラジオ体操と呼んでいる。内容は、筋肉がつかないよう、ストレッチがメインになっている。跳ねたりはしない。そして、マネージャーの隣で見よう見まねの体操をする見慣れない少年を、みんなはちらちらと興味津々の目つきで見ている。

ラジオ体操が終わり円陣になる段になって、私は三善君をみんなに紹介した。

「彼は今日から皆さんと一緒に働くことになった、三善乙彦君、十五歳だ。当面はアルバイト見習いとして働いてもらうことになる。彼はどもりが激しいんだけど、その代わりとてもきれいな字を書く。仲良くやつてもらおうよう、私からもお願いしたい」

私が三善君の頭を手で持って下げさせ、私も頭を下げると、ぱちぱちぱち、と形式的な拍手が鳴った。

円陣が解けると、私は三善君を奥へ連れて行った。

ブロッコの一番禺のスペースにはベルトコンベアがあり、ちょうど飛行場の荷物受け取り場でトランクが流れるように、荷物がずつと流れている。

「黄色いシールに『J』って書いてあるのがあったら床に降ろして。それが今日の君の仕事だ。板

屋さん、ひとつ面倒見てやってくれ。会話はノートを持って筆談でね」

「へい、分かりやした」

板屋さんは五十過ぎの、顔はいかついがとても面倒見のいいおじさんで、右も左も分からない三善君を任すのには一番の適任者と思われた。

「下手すると腰を悪くするからな、荷物を持つ時は腰を入れて、背筋を伸ばして」

「はい」はい、は普通に言える。

「そうら、早速『J』が来た。持ち上げてここへ置いてみな」

流れてきたのは小ぶりの段ボールだった。ただし、「見た目は小さくても、中身がとてつもなく重い画集や金属製器具だったりすることもあるからな、油断は禁物だ」。

三善君は言われた通りに背筋を伸ばし、スクワットのように腰を下ろしてレーンから荷物を垂直に持ち上げると、腰を入れたままそつと床に降ろした。

「うん、なかなかいい。そうやると、一回一回はちよつときついが、疲れは溜まらないし、怪我もしない」

三善君はそう言われると、「ああつす！」と元気よく言い、笑ってお辞儀をした。

初めのうちは七割方を板屋さんが運んでいたが、三善君が慣れてくると、逆に七割方を三善君が運ぶようになった。三善君は体が細い割に意外に力持ちだったことがここで判明した。ただし大型

の荷物で運ぶのにコツがいるものは板屋さんにしか運べなかった。板屋さんが「Jが来たぞ」と声をかける他は、二人は黙々と荷物を運んだ。

ただ、動く荷物に貼られたシールの「J」の字を識別することだけは、三善君はいつまでたつても慣れることができなかった。だが、それは無理もない。一瞬で動く文字を確実に認識することは、実はとても繊細な行為で、普段使わないような集中力が求められる、普通の人にはできなくて当たり前前の職人芸なのだ。文字を写真のように一瞬で把握する特殊能力と言ってもいい。その辺はもちろん板屋さんも分かっており、三善君が「J」の字を見つけられなくても何も責めたりはしなかったし、逆に応援もしなかった。ただ、そのことを言うのを私も板屋さんもてつきり忘れていたため、三善君はずつと目をギラギラと凝らしっぱなしだった。

三善君が働く様子を、ブロックの隅にぼつんとある、ブロック唯一のデスクに座って私は時折横目で眺めていた。そして、自ら進んで汗をかく姿勢に、つくづく真面目な子なんだなあ、と思った。今どき珍しすぎる。そして、彼のような真面目な子が不幸に陥るようなことがあってはならない、とも強く思った。

今日は土曜日なので、家庭向けの荷物は多いものの、企業向けの荷物はほぼないに等しい。一週間の中では楽な日だ。そして明日もそう。みんなにもゆとりがある。

十二時前に一台の大型バスがJブロックに横付けになった。そして、昼のチャイムが拡声器から

鳴る。昼食の合図だ。

食堂は歩いて行くには時間のかかる場所であり、各ブロック毎にバスで移動する。そして全ブロックの職員が一斉にバイキング形式の昼食をとる。料金は会社持ちだ。

私は三善君のところへ歩み寄って声をかけた。

「どうだ、板屋さん、優しいだろう」

「はい」

「でも、見た目は怖いだろう」

「はい」

「筋肉痛とかはないか」

「はい」

「じゃあ、飯だ。ここらは売店とかないから、たんと食つとけよ」

「はい」

* キャッチボール

四時で勤務は終了する。みんなは自販機でコーヒーやらを買ってくつろぎ、これから働く遅番の人と引き継ぎという名のおしゃべりをする。遅番の人は五、六名で、速達便だけを処理する。マネージャーも別の正社員が引き継ぐ。

職員の中には草野球チーム「デリバーズ」のメンバーが四人いる。彼らは普段は練習や試合のため土日が休みなのだが、たまたま先週試合があつたばかりなので今週は練習もオフ、ということ、今週は仕事の楽な土日にシフトを入れている。

彼らはこの時間になるときまつてキャッチボールをやり始める。初めは緩い球で、そしてだんだんと距離をとって球速を早くしていく。グローブが、パンツ、とすがすがしい乾いた破裂音を立て始める。その音はコンクリートの建物に心地よく反響し、投手のやる気を盛り立てる。

その様子を三善君は地面に体育座りして眺めていた。頭が右に、左に、と自然に動く。

しばらく速球でのキャッチボールは続き、彼らの額には汗が滲んできた。三善君は飽きもせずその様子を眺めていた。一方、他の人は作業着から普段着に着替え、まさに帰り支度の真っ最中だった。会社のバスが出発する時刻が迫っていたのだ。それを逃すと、自腹でのろのろ運転の市営バスに乗らなくてはならない。

「やるかい？」

汗をたっぷりかいた男がグローブを持ち上げて三善君に言った。「鈴木ってんだ。あいにく鈴木

一郎という名前じゃない。それならそれで困るけど」

鈴木は三善君にグローブを放り投げた。三善君は立ち上がってそれをしっかりと大事そうに両手で抱きしめて受け取った。

三善君は足取り軽く路面に降りると、肩慣らしもせずにいきなり、ズバンツ、と、重そうな剛球を相手のグローブが構えられた位置へ正確に投げ込んだ。球を受けた斎藤はグローブから手を抜くと、痛そうに手を振った。隣で投げていた二人も手が止まって立ち尽くし、すげー、と三善君の方を見た。三善君の意外な特技が発覚した瞬間だった。

「おい、お前、十分ピッチャーになれるぞ」

『『デリバーズ』に入んねえか？』

そう言われて三善君がニコニコしていると、「彼がちゃんと話せるようになったらな」と、私は横から入って彼らに言った。「まだまだ子供だし、それにどもりがきつくて意思疎通もできないんだ。だからまずそつちを治す方が先だ。残念だがな」

草野球の四人は、へへ、そうだよな、と腐らず明るく納得した。

「早く治してくれよなー」

そう言われて四人にあっさり背中を向けられると、三善君は寂しそうな顔をして私を見た。私は思わず目を背けてしまった。

帰りの電車はいつも寂しい。土日は特にそうだ。向こう側の電車は幸せそうな家族連れと幸せそうなカップルでいっぱいだというのに、逆方向のこちら側ときたら、侘びしいほどに閑散としていて、乗客も心なしか殺伐とだらしなく投げやりに映る。ここで居眠りしたらろくな夢を見ない。

「お前、球、早かったなあ。野球やったのか？」

そう私が訊くと、三善君は横に首を振った。笑っている。

「もしかして、スポーツ万能ってやつか？」

「いや、すごい、いっぱい」

「んー、『いや、自分なんかより凄い人はいっぱいいる』ってか？」

三善君は大きく頷いた。

思うに、環境がまるつきり変わって、しかも不満を口にできず、三善君は相当ストレスをため込んでいるはずだ。今日の職場だつて全くの新しい環境だ。キャッチボールが少しでもストレス解消になるのならいいかもな、と私は思った。

もちろん、野球チームに入れてあげたいのが私の本音だ。だが三善君には自分を証明するものが何もない。会社との雇用契約もない。おまけに本当は十四歳だ。そういえば中二なのか中三なのかも私は知らない。

いつの間にか三善君は眠ってしまった。そして私も眠くなってきた。歳のせいか、最近疲れるのが早くなった気がする。

今日はどの店で何を食べようか？ そうだ、火曜日は美咲を誘って部屋探しに行こう。今のところでは二人分の自炊もできない。

そしてグローブを二つとボールも買っていこう。でも、体のなまった中年の私に豪腕・三善君のキャッチャー役がつとまるだろうか？

* 憂鬱な電話

「ちよつと話がある。座ってくれ」

部屋に戻るなり、私は改まって三善君を隣に座らせた。

「君は、私が何も知らなくても、安心だ、と言ったよな」

三善君は頷いた。「安心だ」自信満々の口ぶりだ。

「けどな、もし君に搜索願が出ていて、私が勝手にかくまって警察にも届け出ないということが知れたら、私は前科者になってしまうんだよ。搜索願が出ていなくても、何かの折にバレたらアウ

トだ。今私が君に対してやっていることは、意地の悪い人から見れば『誘拐』や『拉致』なんだ。そして世の中は意地の悪い人ばかりで構成されている。言ってること、分かるかな？ 分かるよな」

三善君は無言で窓の外を見ていた。腕に鳥肌が立っていた。

「君がどんなに嫌だろうと、私は君の保護者と話をしなければならぬ。私、甘利という者が君を預かっていることと、私の連絡先を伝え、そちらの希望することを訊くことだ」

「こそ、それ以上、話、しない」

「分かったよ。簡単に済ませよう。ここに実家の電話番号を書いてくれ」

私は手帳のメモ欄を指さしてボールペンを渡した。三善君は数秒ためらって、あとは一気にさらさらっと書いた。

「よし、電話をかけるぞ。嫌なことはさっさと済ませよう」

番号を押し、呼び出し音が数回鳴った後、相手が電話に出た。しかし、それは店の電話だった。

「毎度ありがとうございます。『鳥よし』でございます」

「はっ？」

「こちらら、『鳥よし』ですが」

「えーと、そちらにですね、十四歳の子供を持つ親御さんはいらっしゃいますか」

「は？」

「三善さんという方なのですが」

「失礼ですが、どちら様でしょう」

「こりや失礼。私、甘利と申します。息子さんのことでちょっとお話しがあります、とお伝え下さい」

「かしこまりました。三善ですね、ただいま呼んで参ります」

そして保留音の『エリーゼのために』が鳴った。

「家の電話番号じゃないのかよ」私はふざけた調子で言つたが、三善君は沈みきつている。

「三善です。仕事なので手短にお願ひします」

「はじめまして、私は甘利と申します。私は今、行き倒れになっていたお宅の息子さんの、三善乙彦君を預かっています」

「ふーん。で、用は？」

「乙彦君にはそちらへ帰る意思はありません。怖がつています。そこで、しばらく私の元に置こうと思つています」

「ふん」

「それで、彼の身分を証明するもの一式をこちらに送つて頂きたいのです。それがないと、転校や

役所の手続きや通院など、日常生活に支障が大きいのです。それに、何かあったら三善さんの保護責任も問われかねません。ことによると、横柄な正義漢連中に捜査をされ、三善さんの家庭を根こそぎ荒らされ晒し者にされてしまうかもしれません。彼の身分証明一式の件、よろしいでしょうか」

「構わない。あんな暴力少年」

「暴力少年？」

「あなたには関係ない。さあ、住所を仰って下さい」

私は住所を言った。

「確かにそこへ送りましょう」

「三善さんになにかご希望はありますか」

「金輪際、電話はしてこないで下さい。それだけです」

「では最後に、私が乙彦君の保護者になっても構わないのですか」

「ええ、どうぞご自由に」

ガン、と怒ったように電話は切れた。

「三善君のこと、暴力少年だとよ」

私は、ふふ、と蔑むように笑った。「ひでえ親だ、最悪だ」

身構えたような、単調で冷酷そうな声だった。三善君が怯えるのもよく分かる。あんな、自分の子供を全否定するような奴には、そう、暴力をふるっても何をしても構やしない。

私は三善君の肩に手をかけると、

「これからはのびのびと暮らそう。火曜日には広い家を探しに行く。そしたら君は学校に行くんだ。なかに、怖がることはない、嫌になつたら行かなきゃいいだけの話だ」

私は三善君の肩をポンと叩き、肩から手を外してもう一度言った。

「怖がることはない、もうここに君の親はいない」

* 美咲という相棒

月曜日の夜、風呂上がりに私は美咲へ電話をかけた。毎週の恒例行事だ。

私は金曜日の夜に教会の側で三善君という少年を拾ったこと、今もそのまま一緒に住んでいること、部屋が狭くて困っていることを手短かに説明した。

「というわけで、火曜日は不動産屋へ部屋探しに行くことにしたんだ。2LDKくらいの間取りにしようと思っている。よかつたらついてきてくれるととても嬉しいんだけど。するときは、ファミリ

「みたいに見えて印象がよくなるじゃない」

「随分とぶつとんだ話ね。そういうの好きよ。いいじゃないの、澄ましたお母さん役をやってやろうじゃないのよ。嘘をつくのは慣れツ子だからね」

「十一時頃迎えに行くよ。一緒に外でランチを食べよう」

「ところで、向こうの親とは話がついてるの？」

「あははっ、それだけどさ、話がついてるものにも、あっちは全権を押しつけてきたんだ。あの子は捨て子同然だよ」

「そう、そのほうが却ってよかったかもね」

月曜の夜の美咲はいつも上機嫌だ。美容院は火曜日だけが休みだからだ。

美咲は甘利と同年代の独身女性で、「ミラ」という名の美容院を二店経営している。二人の付き合いは長い。

以前は「恋人同士」という呼び名がぴったりくる時期もあった。だが、お互い結婚や家庭にはとんで興味がなく、とりわけ美咲のほうは小さな実業家として、何よりも野心があった。そうして時は経ってゆき、甘い恋心もお互いに薄れていった。そして今では、苦楽を分かち良き友として、ゆつたりと無欲に付き合っている。つまり、セックスはもう何年もしていないし、キスもたまにしかしない。そして、手を繋げばそれだけで満たされるような、そんな間柄だ。

「かなりの吃音なんだ」

「そんなに気にすることないんじゃない？」

「会話ができない程ひどいんだ。けれど、自分の名前はすらすら言える。吃音のことはてんで分からないけれど、どうにも不思議な気がしてならないんだ。喻えるなら、話し方についての技能一切が、何らかの理由で碇をつけられ無意識の底に沈められてしまったような、そんな気がするんだ」

「一度病院で診てもらったほうがいいよ、それ。会話が成り立たないってのは日常生活を営む上でお互い面倒なもの」

私は美咲に言われて、三善君も自分と同じように面倒な思いをしているんだよな、と改めて気が付いた。おまけに彼は我々とは違つて、すらすらと話せる相手が一人もない。

「向ここの親から保険証が届いたらすぐに行かせるつもりだよ」

ランチはイタリアンにした。内装ばかり格好つけて味は全然大したことのない、ペラペラの薄つぺらな店だ。だが、美咲が好きな店はとにかく見かけのいい店であり、見かけさえ良ければ味なんかどうでもいいのだった。それは多分、彼女が美容師だからなのだろう。

私の頼んだボンゴレは塩がきつかったので、もつたないがアサリのスープは全部残さざるを得なかった。そして三善君の頼んだナポリタンはケチャップが多すぎて、ケチャップに麺が沈んでい

た。なので、彼は麵をフォークで掬う度に、ケチャップが服（私の貸した服だ）にはねないような気をつけなければならなかった。それは見ていて苦行のようだった。一方、美咲はマルゲリータピザを頼んだのだが、無難さにかけては大正解だった。

なぜこんなことになったのか？ 我々は愚かにも無意識に期待してしまったのだ。ナイーブだったのだ。しかし彼女は最悪の結果を念頭に置き、損失を最小限に食い止めるべくシビアに行動した。身に浸み込んだ実業家の本能と経験で。彼女は要所要所で常にそうなのだ。その違いが出たのだと思う。

いやらしい笑みをたたえた若くて色黒のボーイが皿を下げると、我々は店を後にし、近くにあったフランチャイズの不動産屋へ入った。

店内はとても細長く、狭かった。

当然、机も通路も細長く、我々は案内された場所へ辿り着くまでに横歩きで進まなければならなかった。机の向こうでは大きなファックスがひっきりなしに紙を吐いていた。

「えー、お探したのは2LDKですか、場所はこの辺で。ええ、たくさんございますよ」

不動産屋の若くて太った兄ちゃんはそう言うと、大量の紙を綴じ込んだ大きなファイル一冊と付箋用紙を我々に渡した。

「気になる物件がありましたら付箋でぺたぺたとお願いしますね。その間に私も新着物件をチェックしますので」

そう言うのと、兄ちゃんは丸々とした腕を上げ、太い身をぐいぐいよじりながら長机の場所を移動した。その姿はまるでベリーダンスのダンサーのようだった。そして机の向こう側へ辿り着くと、先客の対応へあたった。額には汗がうっすらと浮かび、細身の赤いネクタイは透明人間が短い首を締め上げているかのようだった。

渡されたファイルの中身は、よくポストに入っている賃貸物件のチラシがそのままファックスで流れてきたものを、地域・広さ別にファイリングしたものだ。所々に以前候補に挙がったことを示す書き込みがあり、「成約済」の赤い判が押されているものもちらほらあった。

「条件は？」美咲が訊いた。

「安くて幹線道路沿いでない奥まったところ。うるさいのだけはかなわないからね。あと、即入可でないと困る。築年数は十数年程度なら構わない。ボロいのは慣れてる。けれど、水漏れがあると面倒だからね、築三十年というのは勘弁願いたい。そして家賃は十七万まで。それを超えるとサラリーマンにはちょっとキツイのでNG。そんなとこかな」

「広さはどうでもいいのね」

「どうでもいい。荷物もないし」何んにもないもんな、と三善君の方を見た。三善君は目を見開い

て大きく何度も頷いた。美咲は吹き出すように笑った。

「しかしまあ、こんなに紙があると見るだけでも疲れちゃうよね」美咲はファイルを前にして、さもだるそうにでろんとのけぞった。すると頭が後ろの壁にこつんと当たった。今度は三善君が笑った。

「じゃあ前のほうだけ見ることにしよう。ほら、後ろのはファックスの日付が古い」

「ねえ、ここで決めちゃわない？ どうせ不動産屋の情報網はどこも一緒なんだし」

「へえ、そうなんだ。じゃあそうしよう。それにあの兄ちゃん、癖も裏もなさそうだし」

我々は一枚一枚ページをめくってチェックした。家賃が管理費込みで十七万超の物件は無条件に飛ばしていったので、ページはすいすいめくられていった。

ほどなくして、貼られた付箋の数が五枚に達した。そして、ここらで打ち止めにしとくか、そんなに見て回れないし、となった。

我々はファイルをたたんで兄ちゃんの接客が終わるのを静かに待った。病院で名前が呼ばれるのを待つように、ひっそりと、熱心に。そして、我々がじつと待っている様子に気が付くと、兄ちゃんはほとんど間を置かずに再びベリリダンスをしながらこちらへひーひーやってきた。

兄ちゃんの運転する車で、我々は兄ちゃんのセレクトした物件を含めて七件を足早に廻った。即

入可の物件ばかりだったので、いずれも部屋の中を見ることができたが、どこも変わり映えはしなかった、というか、そもそも興味がなかった。人が住めるようなら私はそれだけで良かった。

七件を廻り終え、我々は即決した。

決め手は周囲の環境だった。我々が選んだ物件は、大通りからかなり奥まった細い道沿いにあった。そして側には児童公園と小学校があり、さらには養護老人施設までもがあるという、実にハートウオーミングな立地だった。家賃は管理費込みでちょうど十七万円、敷金三ヶ月、礼金三ヶ月と値は張ったが、私にとってここは別格だった。ここ以外にはあり得なかった。

我々は不動産屋へ戻ると早速手付け金の仲介料を払い、明日残りの代金を朝イチに振り込むことにした。そして無理を言って、明日の昼に鍵の引き渡しをお願いした。ベリーダンスの兄ちゃんは気前よくOKしてくれた。

私は爽快な気分で不動産屋を後にした。

「あだし、役に立ったのかしら？」と美咲が私に訊いた。「何もしてないんだけど」

「もちろんだよ。実に立派で貞淑なお母さんだったよ。君なしで、三善君と二人きりだと怪しまれてしまうんだ。あんな物件も紹介してくれなかったかもしれない。この世の中、見慣れない者は排除される仕組みなんだよ。不動産屋のマニュアルもそうになっているはず。ペルシア系外国人だった断る、無職は断る、非正規雇用者は断る、とか」

「世知辛いね」

「そんなもんだよ」

「それにしても素敵な物件だったよね。私達、何だか本当に慎ましやかな新婚生活を始めるみたいなのがしない？ あそこに男二人で住むのはもつたいないよ」

「言われてみればそんな気もするかも。でもさ、そういうアットホームな生活は我々には馴染まないと思う」

「そうよね、あなたならきつと、一日中狐に騙されたような、しつくりこない感じを拭えないでしょうね。おしりがむずむずむずむずしつばなしで。そして夜になったら、ご両親から『銕介よ、これが幸せなんだ』って力説されちゃつて、困り果てる夢にうなされたりしてね。あたしも人のこと言えないけど」

「我々はさ、九割独立して一割依存するくらいがちょうどいいんだよ。怒らないでほしいんだけど、もし我々が一緒に毎日住んだとしたら、すぐにでも破綻しそうな気がするんだ。一緒に住むだけが能じゃない気もする」

「寂しい時に『寂しい』って言えばそれで十分なんじゃないかな」

だが、美咲が「寂しい」と言ってきたことは長い付き合いで一度もない。それが長所なのか弱点なのかは私には分からない。

もう夕暮れも終わろうとしていた。

「ねえ、今日はあちこち行つてもう疲れちゃつた。どつかで外食しない？」

「粥がとてつもなく美味しい中国料理店があるんだ。そこにしない？」

「お粥さん？ あたしはもつとがつつり行きたいんだけどなあ」

「まあまあ騙されたと思つて。奢るからさ」

「さささ、さいこー！、ささいこーです！」 ずっと無口だった三善君が唐突に口を開いた。

「最高だつてよ。三善君、よつぽど行きたいんだよ」

「ふうん、三善君がそう言うんなら仕方ないや、あたしも騙されてやるか」

三人は顔を見合せてにつこり笑つた。

* 身分証明

我々はめでたく水曜日に引越しを終えた。といつても、私の荷物はちゃぶ台と洋服ぐらいで、学生時代から二十数年使つたベッドと洗濯機は捨てていつた。片や三善君はといえば文字通りナツプサック一個だけが所持品の全てだったので、引越しはタクシー一台初乗り運賃だけで済んだ。

我々は近所の商店街で最低限必要なものを買そろえた。この日はまず大きな前カゴのついた自転車を買った。在庫処分品の羽毛布団二つと象牙色のカーテン一式、天井の電気三セットと洗濯機・冷蔵庫（翌週配達）を買って帰った。自炊道具はよく分からないので浄水器以外は後回しにした。

この日は家と商店街の間を大きな荷物を持って何往復もしたので、肉体労働系の我々もすっかり疲れてしまった。残りは来週だ。コップの水がぬるい。冷たい水が飲みたい。冷蔵庫は今日の夕方配達にしてもらえばよかった。シャワーも浴びたい。ガスの開栓日が待ち遠しい。今から旧居へ風呂に入りに行くのはかなり面倒臭い。

長年愛用のちゃぶ台の上には住所変更届出書がある。買い物の場合に郵便局へ立ち寄ってもらってきたものだ。私は帰宅して間を置かず、届出書に旧住所・新住所を記入し終えると、その日のうちに投函してきた。そうしないと三善君の親から届くはずの身分証明一式が宛先不明で返送されてしまうからだ。

しかし、しばらく経つても小包が届かない場合は、毎日旧居のポストに不在者通知の紙切れがあるかを見に行くのも、面倒で疲れることだが、やむを得ないだろう。荷物が郵便小包ではなく、電話嫌いの宅配業者の手で配達されていたとしたら、住所変更届出書も意味を成さないからだ。

さらに悪いことに、1Kの部屋ももうしばらくは契約が残っているものの、その間に小包が届くという保証もない。懐は痛い、小包が来ない場合は契約を延長するしかない。金輪際電話ができないというのは本当に不便だ。しかしだからといって電話の代わりに手紙を出しても、すぐさまビリビリ破り捨てられるのがオチだろうし。まったく、あの時の私は焦っていた、新居が決まっただけで電話をすればよかったのだ、と私はひどく後悔したが、今となっては仕方がない。あの時はあれが私の精一杯だったのだ。

そんな心配をよそに、引越して最初の土曜日に私宛の郵便簡易書留が届いた。中身は「学生証など」となっていた。

（三善君の身分証明一式だ……）

私はへたりと力が抜け、ふらふらと自室へ歩くと、敷きっぱなしの布団の上に大の字に倒れ込んで、天井を見ながら、深く、深く安堵した。

その送り主だが、住所が名古屋だったのには驚いた。電話をかけた時に市外局番で気付かなかつたのは、その時私が相当でんばっていたことの証だろう。ところで三善君はどうして名古屋から銀座まで逃げてきたのだろうか。あてもないというのに。もしか、親の捜索から何としてでも逃れるためなのか？ ああ、あの怯えようからして、考えられなくもない。

「三善君、保険証とかが届いたぞう」

私がそう言うと、三善君は、あーっ！、あーっ！、と叫びながら慌てて封筒を私の手からふんたくった。すごい力だった。そして自分の部屋へ入ると、すかさず扉を閉めた。見られて困るものがないか、中身を確認でもしているのだろうか。確かに、親からのお涙頂戴な手紙なんかが入っていたら、恥ずかしくて他人には見られたくないものだ。だが、三善君はすぐに部屋からとぼとぼと出てきた。

三善君は無言のまま、ちゃぶ台の上で封筒を逆さにしてその中身をばらまいた。そこには保険証、学生証の他に、何かの店の会員証やポイントカードがいくつか入っていた。そして、それ以外には何も入っていないかった。

真新しい学生証から、三善君は四月生まれで、中学二年生になったばかりだったことが判明した。そして、今も名古屋市内の公立中学に所属していることになっていた。私はすぐにでもこっちに転校させてやりたいのだが、そもそも転校とはどうやるのだろうか？ きつと一度名古屋の中学校へ出向かなくてはいけないのだろう。それも早めに。

そういえば保険証のほうも面倒だ。三善君の実家の保険証に何か変更があつたら、三善君は親の扶養家族だから、古い保険証を実家に送って新しい保険証を送り返してもらわなくてはいけない。

金輪際電話ができないというのに、そんな芸当、可能なのだろうか。

それに、私と三善君の関係も至極面倒だ。血縁も何もない。一応保護しているが、いわゆる保護者ではない。……里親？ 私は里親なのか？ 拉致じゃないよな？

そんなことをあれこれ考えているうちに、私は現代社会というやつがほとほと嫌になってきた。手続き、手続き、手続き！ もう窒息しそうになってしまう。

そして、その時初めて私の背後に「島」が湧き起こった。私は理屈抜きに、それは「島」なのだと認識した。「島」以外の他のものではあり得なかった。その「島」は突如やってきて、有無を言わず私を包み込んだ。割と小さな島だ。そこは――

誰もが誰もを当たり前のように知っている場所。

よそ者がよそ者のまま、不快な思いをせずにいられる場所。

うちへ、ひたすらうちへと向かう、まるで地母神の発するような磁力が、心に絶えず優しく作用してくる、瞑想でもしているかのように心穏やかになれる場所。

実体験が書類を凌駕し、顔が手続きを無化する、何のごまかしもきかない、お互い丸裸の、一緒に温泉にでも入りたくなるような場所。

港を歩く毛並みの悪い痩せた猫達、地面で干涸らびた無数のフグ、波止場に打ち捨てられたタイヤのない錆びた車――そんな、時間が止まったままの場所。

住民もよそ者も一同に呑み込まれ、おし包まれ、生命が脈々と提供されている場所。

家々の鍵がかかっている場所。

爽やかな潮風が頬を撫でる場所。

大往生が似合う幸せな場所。

島――。

* 耳鼻咽喉科医の所見

吃音はどここの科を受診すればいいのか分からなかったもので、会社のパソコンで調べてみた。すると、耳鼻咽喉科が一般的、という意見がおおたかった。幼い頃、耳の中を思い切りほじくりまわされ地獄を見た苦い経験を私は思い出した。

我々は帰りに銀座のアップルストアへ寄って MacBook Pro の一番安いのと無線 LAN ルータを買って帰った。インターネットを利用するためだ。昨日マンションに入っている回線業者に電話をしたら、一週間程度でインターネット回線は通じるとのことだった。

今はなんでもかんでもインターネットだ。情報がそこにしかないので仕方がないし、また便利で

もあるのだろうか、私は何だかパソコンに人格を縛られて鑄型に嵌められるような気がする、なるべくなら使いたくないと思っている。しかし三善君がやってきてからというもの、世の中分らないことだらけになってしまったので、パソコンは魂を吸い取るものだと思っっている私のような変人も、終に降参してパソコンを買わざるを得なくなった、というわけだ。どこか遠くに、情報の必要ない世界があれば行ってみたいものだ、とつくづく思う。

そして、こうやって徐々にモノが増えていくのは個人的には本当に気に入らないのだが、もう独り身ではないのでそこはある程度やむを得ないのだ、と近頃は思うようにしている。本当は冷蔵庫も買いたくないのだ。いわゆる、矜持、というやつだ。

病院へは三善君一人で行ってもらいたいところなのだが、なにしろ会話がさっぱりできないので、仕事休みの火曜日に来るのを待って近所の町医者へ一緒に行った。

病院では発音テストをし（散々な出来だった）、過去の事故歴を尋ねられ（事故歴なし）、のどのレントゲンを何枚か撮った。

結局、異常は見られない、心因性だろう、心療内科に行かれるといいかもしれません、と言われて診察は終了だった。

紹介状を書きましようか、と申し出られたが、私は即座に断った。

「ありがとうございます」

「どうぞお大事に」

スリッパをしまつて靴を履き、扉を開けて外に出ると、晴れた通りはサンバイザーのおばちゃん
で賑わつていた。あちこちで、何人かで立ち止まつておしゃべりをしている。

手押しカートの婆さんも負けじと大勢いた。腰が九〇度以上曲がつた婆さんも元気に歩いている。
我々の近くを歩く婆さんのカートからはたくさんの長ネギが顔を出していた。

心療内科？ ふぎけんな、いま三善君の心をほじくりまわしたら途端に壊れてしまうじゃないか、
と私は憤りを覚えていた。確かに医者と言っていることは科学的には正しいとは思うのだけれど、
我々の心情に対しあまりに突き放した冷酷非情な態度に映った。

家に帰るとお茶を沸かし、ちゃぶ台をはさんで二人で話をした。

「今日、病院で心因性だと言われただろう。残念だったな。心療内科だとよ。どうやら吃音を治す
には、三善君の心を奥底までほじくり返さないといけないらしい、ときた。そして、そんなところ
に足を突っ込んだら最後、冷たい親の仕打ちや、学校の友達や家で受けた心の傷、話せなくなつた
悪夢のきつかけ——そんな思い出したくもないことを正面から直視することを強いられるんだ。見
るもおぞましいものを。そしてそれらを克服しないと治らない、と向こうは浅はかな善意で軽々し

く言ってくるのだろう。

しかし私は、それは無理な相談だと思う。過酷すぎると思う。名古屋から、あんなちっぽけなナツサックひとつで、はるばる東京まで逃げてこなくちゃならなかったんだ。何のあてもないのに、ただがむしやりに。そしてきらびやかな繁華街で一人野宿だ。教会にすら放置されちまう。もう何も信じられない。明日のことも真つ白なくらい分からない。このままじめに死んでしまうのか——そう思ったかもしれない。思っただろう？

言いたいことも言えない、というのは、一体どれだけフラストレーションが溜まり、どれだけ悲しい思い、悔しい思いが積み重なるのか、私には想像もできない。そして、そんな私は何の助けにもなれない。

下の公園へキャッチボールをしに行かないか。三善君の球を受けてみたいんだ」

三善君はぼろぼろ涙を流していた。

「言いたいことは、ちゃんと言いたいよな。そりやそうだ。でもまあ、ゆつくり行こうぜ。のんびり付き合おうよ。」

思うんだ。私は二十年も一人きりでハードボイルドな一匹狼ぶっていたけど、本当は君のような息子が欲しかったんじゃないかってね」

三善君は立ち上がり、自分の部屋へ入って静かに扉を閉めた。そして、わーっ、と布団に頭を埋

めて泣いた。名古屋の頃から今日まで懸命にこらえてきた悲しみを全部吐き出すかのように、とめどなく泣いた。

私ももらい泣きしそうになったので、気分を紛らわすために、外に出て自転車で飲み物を買ってくることにした。三善君もあれだけ泣けばのどが渇くだろう。

家に帰つてくると、三善君はリビングの壁にもたれて足を投げ出し座っていた。既に泣き止んでいて、すつきりとした様子だった。手にはグローブ二つとボールを持っていた。

「よし、やるか」

「うしーっ！」

公園には球技をするための金網で囲まれたスペースがあつて、我々はそこでキャッチボールを始めた。キャッチボールなんて一体何年ぶりだろう。

我々は肩慣らしのゆつたりした投球をしばらくやった。そして体が温まってきたら、私はしやがんでグローブを構えた。

三善君は私のグローブに視線をすえ、弓がしなるような、美しい投球動作をした。すると、球はいつの間にか私のグローブに収まっていた。乾いた音が響き、遅れて手が痺れる。

痛かった。そして、怖くなった。それは草野球レベルの一线を越えた速球だった。コントロール

がずれていたら私は間違いなく病院行きだ。

しかし、これも三善君の悲しみに較べれば、と私はしばらく恐怖を必死で我慢した。そして、これからすぐにでもマスクと防具、キャッチャーミットを買いに行かないと、と思った。またモノが増えてしまうが、仕方ない。三善君がこんなにも楽しそうなんだから。

* 二年間

時というのはいつの間にか地味に過ぎていくものだと思つていたが、三善君がやってきてからの二年間はあつという間に派手派手しく過ぎ去つて行つた。本当に一瞬のようだ。そんな短い間に彼の背丈が私を追い越してしまつたのが私には不思議でならない。

今、三善君は地元の公立中学に通つている。気分が落ち込んだ時は休んでいるが、それでもまだ登校している日数のほうが多い。上出来だと思う。そしてもうすぐ卒業だ。本当に、悲しいほど早いものだ。

三善君は腕っ節が強いので、吃音でいじめられたりはしていない。だが、担任の教師によれば、最初の頃はコミュニケーションがまるでとれなかつたので、周りからはずっと遠避けられていたらしい。怖いもの、狂気めいたもの、異質なものを遠巻きにするような雰囲気だつたのだろうか。そしてその状況は、かなり意思疎通のできるようになった今でもなお、惰性的ように変わらず続いているという。

一般に、一度定着してしまつた状況をがらりと変えるのは非常に困難なことであるし、受験を前

に汲々としている今の子供達であれば尚のこと、三善君を受け入れる心の余裕などどこにも残されてはいないのだろう。それに、三善君の哀しい生い立ちを知らない人から見れば、吃音の彼は単にうつとうしくて苛々させられるだけのまどろっこしい人物にしか映らないのだろう。そう思われてしまうのは私も本人も諦めている。しかし、それくらいことは三善君にとつては何でもない些細なことなのだ。そう強気に思っていないと到底先へは進めない。

それはそうと、三善君はこの二年間で一度でも恋をしたのだろうか。彼も思春期の真つ只中だ。だとすれば、恋に限らず、異性全般から、吃音が元で遠避けられるのはたまらなく辛いことだろう。当然、三善君は私にそのようなことを一切話さない。彼は弱い面を見せるのが苦手なのだ。あるいは、弱い面を自分からさらけ出すと、そこから自分が自壊してしまうと思っているのかもしれない。それとも、単に私が三善君自身のメンタル面での悩みを吐露するほどには信頼されていないだけの話なのかもしれない。それに第一、男同士では照れくさくてそういう話はあまりしないものだ。したがって結局のところは何も分からない。

さて、その吃音だが、私と三善君の生活が不器用なりに安定してくるにつれ、少なくとも私と美咲に対しては、少しずつではあるが改善していった。言っていることがほとんど何も分からなかった状態から、根気強く付き合えば大抵のことは通じ合えるようにまでなったのだ。大きな希望だ。

三善君は部活に入ってなかったので、帰りはいつも早かった。そして私が六時前に仕事から帰宅し、その時雨が降っていないければ、夕方はいつも下の公園で飽きもせず二人でキャッチボールに興じた。

キャッチボールの良い点は、それがしんみりしているところだ。しみじみ、と言つてもよい。心がじわつと優しく癒されるのだ。それでいて、運動不足の解消にもなるし、スカツしたりもする。キャッチャーがつける防具一式を大仰に身に纏った私は、三善君の速球を五〇球だけ受ける。五〇球投げ終えても三善君にはまだまだ余裕はあるが、それ以上やると私の手のひらの皮がはげてしまうので、五〇球で終わり、ということにしている。

そうやって毎日のように三善君の球を受け続けていくうちに、私は彼の速球が見えてくるようになった。これは自分でも驚きだった。動体視力は加齢で確実に衰えているはずなのに。だが、そのことは三善君には黙っていた。そう口にするると、彼は喜々としてもつと速い球を投げてきそうだったからだ。

いつも三善君は無理せずリラックスして私へ投げている。それでも金網越しに見物客を多数集めるほどの速球なのだ。この速球がどこにも生かされないのはもつたない気もするが、学校の野球部は陰湿そうで嫌いだ、と本人が言うので仕方がない。だから、三善君が中学を卒業したら、彼をどこかののびのびとした草野球チームにでも紹介してやろう、などと私は勝手に考えている。

そして毎週火曜日になると、美咲がDVDを持ってうちに遊びに来るようになった。DVDプレイヤー付きの大画面テレビを私が何となく買ってしまったからだ。そして三人でまったりと恋愛映画を観る。美咲は好みが極端で、観るのは徹底して恋愛ものばかりだ。

美咲はそれまで火曜日は毎週、私や友人や、あるいは一人で、繁華街をピンヒールで闊歩していたという。だがもう体に無理がきかなくなったのだそうだ。私にもよく分かるが、体が衰えゆくのは寂しい話だ。それとは別に、この男臭い殺風景な部屋に入るのは、まるで異世界に侵入するようで、いい気分転換になる、とも言っている。

火曜日の夕方、金網の中で我々はいつものようにキャッチボールをし、それを美咲は側で眺めている。我々三人は何も言葉を交わさない。そしてただ、満たされている。一週間で一番幸せな時だ。

* 島の出現

もちろん、全てが順調な二年間だったわけではない。

まず、転校の手続きは本当に大変だった。それは、名古屋市の中学校、名古屋市の児童相談所、そして東京の中学校に区の児童相談所の四者を交えた大がかりなものだった。私はナンセンスで似

たような書類を山のように書かされた。週二回の休みは誰かしらとの面談でつぶれた。そして、三善君の受け入れに難色を示す東京の中学校校長のところへ何度も足を運んだ。三善君の吃音は生まれつきのものではなく、親の虐待で一時的に言葉を失ってしまっていること、知能はきわめて正常なこと、何よりも本人が転校を心から望んでいること、見守る体制は整っていること、などを、区の子童相談所職員付き添いのもと説得を重ね、最後にはようやく校長が折れてくれた。

それ以前に、転出・転入の手続きもひと苦勞だった。まず名古屋市のNPOの弁護士、民生委員、児童相談所と数回の面談を行った。弁護士を頼んだのは親権のことが私にはまるで分からなかったからだ。民生委員には三善君の親とのつなぎ役を期待した。彼らは私との面談と平行して三善君の親のほうとも面談を行っていた。結果として彼らは私の味方となってくれて、彼らの仲介で、三善君の転出手続きを進めるよう三善君の親を動かしてくれた。そのほかにも、両者の間には我々のあずかり知らない様々な耳をふさぎたくなるようなやりとりがあつたらしい。この件の他にも、民生委員の方には私と三善君の親との仲介役に快くなつてくれた。ありがたい限りだ。

しかし、大変だったのは行政手続きだけではなかった。何よりも苦勞したのは意思疎通不可能な三善君の吃音だ。ほとんど何をすることも私が側についていないといけなかった。中には筆談に応じてくれる親切な人もいたが、とにかく世の中は慌ただしい。のんびり筆談できる空気が周囲には圧倒的に足りなかった。それに、三善君本人があまり筆談を好まなかった。外国人か、耳の不自由な

人に間違われてしまうからだ。見知らぬ土地に行くとは本当にトイレ以外は付きつきりだった。

そして、これは三善君だけが大変だったことだが、学校での会話には相当苦勞しているそうだ。

まあ当然だろう。一体どうやっているのか想像もつかない。概して中学生はとめどなくしゃべる生き物だ。そこで私は、三善君に学校でどう過ごしているのか訊いてみたところ、案の定、周囲から孤立しているのだという。ずっと押し黙っているからだ。しかしどうしても話さなくてはいけない場面では、以前私に見せたように、俯いて小声で何度もフレーズをぶつぶつ練習して、スムーズに行ったところで一気に勢いだけで声に出して言うのだった。当然時間はかかるし、それに心に心がこもらない。英語を知らない人が英語の歌を耳で聞いて、聞こえた音だけでそれっぽく歌うのと似たことをやっているのだから、意味が抜け落ちるのも当然だ。また、長いフレーズも全然言えない。三善君に会って最初の五月頃だっただろうか、学校で孤立していることを知った私は、三善君に家で発声練習をすることを提案した。すると三善君は、

「あまり気が進まない」

とメモ帳にきれいな字で書いてよこした。

少しでも良くなるかもしれない、と私が念を押すと、

「そんなにきつおんがいやなら、僕はここを出て行かなくてはならなくなる」

と、思い詰めた顔をして、これもきれいな字でよこした。

吃音のことを触れられるのはそんなに嫌か?、と尋ねると、三善君は何も言わずに自室に閉じこもってしまった。まあ、よくあることだ。

それでも折に触れ何度も何度も同じ提案をしているうちに、ようやく、やってみてもいい、と書いてくれた。結構頑固なところのある子なのだ。

発声練習の内容は、私の好きなムーミンの文庫本を朗読する、というものだ。国語の教科書でもいいぞ、と言ったが、三善君は、ムーミンでいい、と筆談で答えた。

ルールはひとつだけ、小声でぶつぶつ練習しないこと。

「わーた」

さて、いざ始めてみると、肝心の「ムーミントロール」がなかなか言えない。どうしても、何度やっても「むっ、み、とおお」と、まるで格闘技のかけ声のようになってしまう。だが、私は構わず続けさせた。吃音だからしゃべれないのではなく、言葉がつかえるのを恐れ緊張するから吃音になるのだ、という、インターネット上に載っていたとある医師の意見がどこまで正しいのかを知るためだ。この試みは、吃音を治す訓練であると同時に、私と三善君の間にある心の距離を埋めることでもあるのだ。

私は三善君には努めて気楽に接するようにしているが、それを三善君がどう思っているか、どう感じているかはもちろん私には分からない。そして、かつては流暢に話せていたという三善君の吃

音が一向に治らないのは、彼が他人はともかく、私の前でも、ちゃんとしゃべらなくちゃ、と緊張を強いられている証しなのでは、という可能性を私はどうしても疑ってしまう。私は三善君の親でも親戚でも何でもないのでからそうなるのも当たり前なかもしれない。だが、私の前で三善君が気楽になれなければ、我々にはもうどこにも救いがないような気がするのだ。

その時、「島」がまた現れた。そして、いつものように不愉快さの塊を波がさらっていくのか。

私は何度も、「島」が背後に迫り、そのまま「島」に全身包み込まれるのを感じた。

「島」は私を排除することがなく、いつでもすんなりと、まるで親が乳児を受け入れるように、それが当たり前のように入れた。それだ。

だが、この「島」が何なのか、実は私にはさっぱり分からない。私の幻想だと言ってしまう。それまでだが、その割にはリアリティがある。生活感もある。それは小島でありながら、知り尽くせないほどの多彩な営み、あるいは、深い沈黙の持つ存在感を一つの塊にしたようなものだった。そして何よりも、見返りなく私を慰めてくれる柔和な存在だった。

「島」は決まって、私が苛々している時に、私の背後にすつと現れた。特に役所に行くとき必ずやってきた。理由は簡単で、例外なく苛々させられるからだ。

苛々が起きる。そして「島」が超然と背後に現れ、私を包み込む。すると不思議なことに、私が

苛々させられていたものは、あたかも潮風にふわりと流されるように、引き潮に飲み込まれるように、もうどうでもよく感じてしまうようになるのだった。そして苛々は平穩へと何食わぬ顔で治まってしまう。

いいことじゃないか。しかし、私はこの「島」が少々薄気味悪くもあつた。「島」は私の感情を凌駕して、私を深層からなだめ、私の根幹を容易にコントロールする——そのような、私の意識を超えたものである「島」の存在に、私は自尊心や自信を奪われてしまい、自分の小ささ、無力さにめぐってしまうことが間々あつた。そして、そんな時は三善君を頼ってしまうのだった。

私は、この「島」を三善君と共有できたら、といつしか思うようになっていた。しかしこんな訳の分からない話、果たしてまともに聞いてくれるだろうか。

* 島の話

三善君に初めて「島」の話をしたのは、出会って最初の年の、梅雨空の夕暮れ時だった。

私は三善君から鉛筆をちよつと借りた。すると、その鉛筆の側面にはひらがなで「みよし おつ

ひこ」と活字が白く印刷してあった。端に鉛筆を嚙んだ跡が残っている。

「この鉛筆はもしかして大事なもんじゃないの？」

「あー、あいじ」

そして三善君はメモ帳にさらさらと書いた。

「これは小学校の卒業式にもらったもので、そのころは自由に話せて本当に楽しかった。そのえんぴつを見ると、楽しいだけの思い出にひたたりすることができると。むやみにすりへらしたくない。だからこつちを使つて」

そう書いたメモを見せて、代わりに安物のシャープペンシルを渡してくれた。

私はそのシャープペンシルで「鳥」の図を描こうとしたが、ちつともうまく描けなかつたので、そのまま紙を丸めて捨てた。「三善君、シャープペンありがとう」

今日は雨だ。なのでキャッチボールはお休み。上手く話せるかどうか分からないが、「鳥」のことを三善君に話してみようと私は思った。

「三善君、ちよつと長話してもいいかな。なに、大した話じゃないんだ。私の頭の中にある『鳥』の話なんだ。馬鹿馬鹿しいと思うのは全然結構。でも、三善君には知っておいてもらいたいんだ。理由は上手く言えないけど、何となく、そんな気がする。」

このことは美咲にも、他の誰にも話したことがないし、話す気もない。なぜって、この『島』は私の心の奥にある大切なものだからなんだ。あまり大安売りはしたくない」

予想に反し、三善君は黙って、熱心に話を聞こうとしている。私が実務的なこと以外の話をするのは珍しいからだろうか。

「この『島』は、私に嫌なことがあつた時によく現れるんだ。それも、三善君と一緒に住むようになってから現れ始めたんだ。でも、この『島』と三善君の存在との間に関係があるのかなのか、私にはさっぱり分からない。しかし分かったところで、どっちも私の意思の外側にあることだから、いずれにせよ私にはどうしようもないんだ。とにかく、嫌なことがあつたら『島』は現れ、私の意識を問答無用で包み込んでしまう。それだけだ。

『島』の夢もよく見る。そこは小さな島で、頑張れば自転車で一周できるくらいのささやかな大きなんだ。でも、人は割と住んでいる。百人ちよつとくらいかな。

とにかく小さな島なので、どのだれ、と言うだけで、誰にでもそれが誰なのか特定できてしまう。そればかりか、その人がどんな人で、どんな事情を抱えていて、子供が何人いて、職業は何で、といったことすらすぐに浮かび上がってくる。誰でもだよ。とにかく世間が狭いんだ。

だからといって、彼らは窮屈に生活しているわけではない。開けっ広げなだけなんだ。こんな小さな島で隠し事をして仕方がない、ならば堂々としていようじゃないか、という心境なのか。だ

からみんな、とつてもフランクで思いやりがあり、心が逞しい。

そんな島民の住む島に私はよそ者として降り立つ。しかし彼らは不思議なことに、私を好奇の目で見たりは一切しない。もちろん仲間とも思わない。そういう、本当に心地よい無視をしてくれるんだ。まるでみんなかつてはよそ者だったみたいだね。

そんな『島』の中にいると、私は荒れていた心がどんどん静かに落ち着いて、なにかよきものに満たされてくるんだ。『島』の持つおおらかで不思議な力のせいだね。もう、汲々としても仕方ないじゃないか、広い心で行こうじゃないか。相手にも事情があるはずなんだ。それに耳を傾けたい。すると、きつと自分の浅はかさが浮き彫りになるのだろう、そして表面的な反目はかけがえのない紐帯へと反転するかもしれない、つてな風に、いじけた心にどんどん光が差してくるんだ。

夢の中で、私も彼らのように開けっ広げになりたくなくて、私はひとり話し相手を求めて歩き回っていた。すると、人が集まっている一角が見つかった。私はその人混みの中へ行くと、そこは葬儀の場だった。

『そのあなたはとても誠実な顔をしておられる』

葬儀の参列者は、たまたま通りかかっただけのよそ者の私にもなぜか、死者の生前の輝かしい様子を親しげに滔々と語り続けてくれた。私はとても奇妙な感じがしたが、その人たちがとても熱心に話してくれるので、私もそのまま熱心に話を聞き続けた。

死去したのは漁師をしていたお爺さんで、子供の頃から海に出ては家計を助け、何十年も身を粉にして働き、引退してからは畑仕事に精を出した、そんな人生のお手本のような生き方をした人だったという。私が、偉い方だったんですねえ、と相づちを打つと、話し手の方は、そうなんです、と涙をぼろぼろ流した。その涙があまりに正直だったので、私ももらい泣きしうになつてしまった。少しくらい涙が漏れ出ていたかもしれない。

亡くなつたお爺さんは、生きた証しをたくさんの人に鮮烈に残すことができた、自分とは全く比べものにならないような人徳者だったんだなあ、と私は棺を見ながら死者の生前に思いを馳せ、しかし、自分もそうありたい、とは思えなかつた。だつて到底無理だよ。そんなわけで、私は自分より遙かに優れた人物の大往生に偶然関わつたせいで、もうちつぽけな自分のことなんてどうでもよくなつてしまつたんだ。でも後で気付いたんだけど、この、どうでもよく思えた時こそが、本当に開けっ広げになれた時だつたんだよね。分かるかい？

で、そこまで来ると、『島』は用が済んだとばかり、一抹の余韻を残して、私の周りからふっと消えてしまふんだ。

とまあ、そんな『島』が、私の中にはあるんだ。

変な話だろ」

私は照れ笑いをしたが、三善君は「すぎえー」と言つて、自室に入り、ドアも開けたまま机に向

かつて熱心にカリカリと文章を書き始めた。

* 三善君にとつての「島」

一時間もたった頃だろうか、三善君が紙を何枚か持つてリビングに現れた。そこにはこう書かれていた。

甘利さんが自分の話をしてくれたので、僕も自分の話を少しだけしてみたいと思います。

うちの家族は、父が客の一人を愛人に囲ってしまったから、僕も母もおかしくなっていました。ちなみに僕は一人っ子です。ふつうならりこんですが、うちは家族で名古屋コーチンの料理店をしていて、父と母は二人とも店にいないと店がなりたたないので、りこんはしていません。けれども、父母はたがいをとてもうとましく思い、その間に生まれた僕のことにはさうとうとましく思っていました。悪いことはぜんぶ僕のせい、毎日がしゅら場でした。おかげでけんかには強くなりましたが、心は弱いままです。毎日びくびくおびえていました。そして僕は、父をなぐり、母をなぐりました。心が痛みましたが、僕は無力だったので、しかたがな

かったのです。

僕は甘利さんの言う名前のない島に住みたいと、とても強く思いました。そこにはゆるぎないちつじよがある、と感じたからです。僕が今いちばんほしいものは、安心感を与えてくれるようなちつじよなのだ、と気付かされました。

今はわりと安心感をかんじています。甘利さんにはとてもかんしゃしています。甘利さんのおかげで、今では日々のどこをとつても安心です。けれども、僕には甘利さんのむねにとびこむことを考えることはできません。

甘利さんには分かつてもらえないかもしれませんが、だれかに見捨てられるということは、そうぞう以上にこたえます。僕の場合、親のような、ぜつたいな存在から見捨てられてしまいました。すると、ほんとうに自分が無価値に思えてしまうのです。りくつぬぎで。でも、自分が無価値だなんてとてもたえられません。だから、そんな無価値な自分を、僕も見捨てないといけなくなるのです。すると、じゃあ僕はいつたいたいなんなのか、もうぜんぜん分からなくなるのです。そうやって、僕はしゃべれなくなつてしまいました。

でも、もしそんな島があれば、僕は言葉をとりもどせるような気がします。いや、言葉だけでなく、まわりからも、自分でも、これでいいんだ、といえるような自分のありようが、えられるような気がするのです。

今の自分はどこかがまちがっています。僕は甘利さんの言う島をちつじよのしょうちようとうけとりました。自分の心の中にもそんな島があれば、きもちいいちつじよがあれば、きつといろんなことがかいつするのになあ、と思いました。

いや、むしろ、僕じしんがその島になりたい。よくばりすぎでしょうか？

私は三善君の長文を読み終えると、ふうと息を吐き、感想を話した。

「長文、ありがとう。とても言いにくいことも話してくれて、私はとても嬉しいよ。自分を見捨てた両親を殴らざるを得なかったなんて、とてもじゃないけど可哀想だなんて陳腐な言葉じゃ表現しきれないよな。辛かったな。まるで自分を殴っているみたいだろう。君は悪くない。絶対に悪くない。私が保証する。」

で、『島』のことだけど、『島』が秩序の象徴だなんて、私は考えもしなかったな。鋭い意見だ。言われてみると確かにそうだ。

我々は、我々だけではどこまで行っても赤の他人同士だよな。そして自分のこともよく分からないう。で、そこを一步乗り越えるには、『島』の中のコミュニティのような連帯感、一体感、つまり「秩序」だな、それが外部から我々を浸してくれなくては、ちよつと難しいだろうね。あるいはそういう体験をするとかね。すると、そこから初めて新しい自分というものが立ち昇ってきて、三善

君の言うように、自分の言葉というものも獲得できるのかもね。

けれども、こんな『島』が現実にあるとは、実は私は思っていない。あつたらいいな、とは思っているけど。だから、発音練習はこの下町のマンションで頑張つていこう。

でも、それは別として、いつかどこかの島にでも旅行に行つてみたいな」

「行こー！、行こー！」

普段は丸めて捨てる筆談の紙だが、これは大事にとつておこうと思つた。三善君がこんなに心を開いてくれたのは初めてだからだ。額縁に飾りたいくらいだ。

姿は違えど、三善君の中にも「島」のようなものの萌芽は確かにあつた。でなければ私の「島」にあそこまで反応することはできない。それはまだ三善君を救うことはできないけれども、希望を照らすことならできる。「僕じしんがその島になりたい」だなんて、中学生の感性を超えている。

いや、私のこの「島」は本当に三善君自身なのかもしれない。

その時は長期休暇が取れたらすぐにでも行くつもりだつたのだが、仕事にかまけて、それに姉の死もあり、ずるずると二年が過ぎてしまった。

* 姉の死

ツクツクボウシが息絶え絶えの初秋の頃だった。

ポストに葬儀の案内が記された速達が一枚、風俗のチラシに紛れて入っていた。

「鬼頭諭美（享年四十五歳）」

姉だった。

子供の頃の私が知っている姉は、ふくよかで華やかでこそ真面目な人だった。何だか四六時中人生を謳歌し、まるで悲しみすらをも楽しんでいるかのようには、いつでも胸を張って誇らしげにしていた印象がある。それがどうしたことか、姉の結婚後は、夫の名前が併記された年賀状が届くのを除いて、今の今まで何の音沙汰もなくなってしまった。姉と私とはそれほど親しい仲ではなかったし、浮き世離れた面が姉には確かにあったが、それにしても極端すぎた。

それも私に対してだけではない。私も滅多に実家の親へは顔を出さないうちだったが、姉はそれに輪をかけて実家から遠ざかっていた。それを両親も私も不思議に思ったりしてはいたが、嫁ぎ先が遠かったのと、子供がいなかったので、父親なんかは「まあ、嫁いでしまえばこんなものか、空しいもんだな」とこたつで飲めない日本酒に口先をつけながら愚痴をこぼしたりしていた。その姉は地元の大企業の管理職でバリバリ働いていることになっていた。そして休みがなかなか取れない

ことになっていた。

死後に分かったことなのだが、姉は三十五歳の時から乳ガンに罹り、以後十年間、ずっと闘病生活をしてきたのだ。急死ではなかったのだ。なるほど、実家になんかのこのこ来られるわけではない。それを親にも私にも親戚にも、姉はずっとひた隠しにしていた。葬儀の場で夫が話すところによると、親より先に死ぬのは最大の親不孝だから、言う勇気がなかった、というのがその理由だった。心配性の親に心配をかけたくないし、それに自分が先に死ぬなんて、とても親に合わせる顔がない、と。そして姉は、華やかなキャリアウーマンという幻像を我々に死ぬまで見せ続けてくれた。このように、姉は最期まで徹底して華やかでくそ真面目な人間だった。

私は実家と連絡を取り合った。

「姉貴のことだけど」

「おう銚介か、こっちにも届いたよ。まったく諭美のやつ、なんてことしてくれたんだ。死に際にも会わせてくれないなんて、そんなのないよ、なあおい……」その後は嗚咽で言葉にならなかった。

三善君を一人で置いていくわけにはいかなかったので、私は一緒に葬儀の場へ連れて行った。逆に美咲は、姉に一度も会ったことがないので誘わなかった。美咲と私とは籍は別だが、お互いの顔見知りの人の法事の際には、大抵二人で出席しているのだ。

「三善君、葬式に出たことある？」

三善君は首を横に振った。

「実に簡単なんだ。死化粧をした私の姉が横たわっている。みんなで棺に入れる。寺へ移動。坊さん達が意味不明の念仏を延々と唸る。火葬場へ移動。工場にありそうな武骨な機械で姉を焼く。焼き終わるまでの間、参列者は軽食をとり酒を軽く飲み交わす。焼き終わると骨を骨壺にうやうやしく入れる。墓地へ移動。骨壺を墓に納める。それでおしまい。

三善君にはきつと茶番に映ると思う。でもな、仕方ないんだ。死を前にして、人はどうしたらいいのか、誰にも分からないんだ。誰も死んだことなんか知らないからな。だから茶番劇でお茶を濁すしかないんだ」

「うん」

私は親と久しぶりに会った。

「銈介、たまには帰ってこいや」と母が言う。親というものは、そっちに行くぞ、とは絶対に言わない。

「ところで、隣の学生服の子は誰なんだい？」

「ああ、彼は三善君といって、わけあってうちに居候しているんだ。とてもいい子だ」

「三善君、はじめまして、銈介の親です。銈介に悪いことを教わったりしないよう、気をつけて

ね

「ああ、あいつ」

三善君の吃音に、父母は露骨に怪訝な顔した。三善君の顔が少し不安そうに曇った。

「彼、強度の吃音なんだ。でも、言葉が詰まるのを恐れず積極的に声に出すようにと言いきかせている。彼がそれを守ってくれているおかげで、吃音も少しずつよくなってきているんだ。気を遣うことはないよ。彼はとてもタフな子なんだ」

親に続いて、我々は遺体の前で線香をあげた。そして遺体にすり寄った。すると脇に立っていた葬儀屋の人が耳打ちして、

「髪の毛はかつらですので、お触れにならないようお願いします」

と囁いた。そう言われると、確かにそんな風に見える。生前も我々に嘘をついた挙げ句、死後もかつらで我々をごまかさなくてはならないなんて、何だかとてもやるせなさを感じる。くそ真面目な姉はかつて、こんなに嘘つきだったのだろうか。

いや、そうではない。最期にこの派手なソバージュのかつらを選んだのも、きっと姉の意志なのだろう。嘘をついているのではない。これが姉の偽りのない姿なのだ。

当然だが、姉はガンで痩せ細っていた。結婚式を控えてダイエットしていた時ですらふくよか

だったのに、人はここまで痩せられるのか、と驚くくらいに痩せていた。おまけに右の乳房がなかった。それは厚い白装束の上からでもはつきりわかった。

私がかつて乳房のあつた右胸に視線を落としているのに姉の夫が気付いて言った。

「全摘は三十五歳の時でした。既にガン細胞は五センチに発達していて、そうせざるを得ませんでした。全摘が決まった夜、妻は一晚泣き明かしました」

我々の全然あずかり知らぬことだった。姉はいじめられても叩かれても泣かない子供だったというのに。

「しかし、手術後に分かったことですが、腋の下のリンパ節にもガン細胞があつたのです。医者からはステージⅢ、いずれガンはリンパを廻つて全身に転移します、と断言されました。過酷な宣告でした。しかし、妻はもう泣きませんでした。逆に僕が、気落ちしないで、と励まされたくらいです。妻は自分の死に対し毅然としていました。一人の時は怯え泣いて、身に降つた不幸を呪つていたのかもしれませんが、ですが、人前ではいつでも生き生きと明るく振る舞っていました」

いつの間にか両親がやってきて話を聞いていた。

「妻は、もし病気がよくなつたら、実家に帰つて下戸同士、一緒にお酒をちびちび飲みたい、とよく僕に語っていました。もちろんそんな可能性はゼロだということは重々承知の上で。そして、そんな彼女の最期の言葉は『お父さん、お母さん、ごめんなさい』でした」

それはちよつと出来過ぎた話だよなあ、リップサービスじゃないかな、と私は訝った。

「せめて、死に際に会いたかった。手を握ってやりたかったよ」

しかし、年若い両親は涙をこらえきれなかった。

「その点は大変申し訳なく思っています。我々も妻へ何度も説得を試みました。しかし、妻の意志があまりに固かったので、我々にはどうすることもできませんでした」

「なぜなんだい、教えてくれよ、諭美！ 諭美！」

思いあまつて父が遺体の肩を両手で揺らすと、姉のかつらがぼろりと外れてしまった。周囲の空気が一瞬で凍った。かつらの下の、黒いメッシュの水泳帽のような醜いかつら止めが衆目に被らされた。父には怒りにも似た白い蔑視の視線がその場の人たちから投げられた。すかさず葬儀屋の人が割って入り、かつらを元通りにすばやく直した。

父は急におとなしくなった。恥をかかせてしまった、と思つたのかもしれない。

「こんな諭美、俺は知らない。こんな痩せこけた、闘病に明け暮れた諭美……。俺達が、親より先に死ぬのはどうのこうのなんて下らないことを言わなければ、こんなことにならなかつたかもしれないのに。ああもう、俺は馬鹿だったよ、本当に」

納棺の開始時間は過ぎていた。喪主である妻の夫は父が落ち着くのを待つていたのだ。そして父が小さく静かになると、姉の夫は葬儀屋に合図を送った。

「それでは、納棺を始めさせて頂きます」と葬儀屋が言った。みんなが立ち上がる。父も立ち上がり、部屋の隅に移動した。

後は予定調和の茶番が続いた。

姉は、本当は怖かったんだと思う。姉は両親と私の四人でくつろぐという幻想に大きく頼っていたのだと思う。私は本当はガンなんかじゃない、これは夢、本当は元気に毎日働いている、ようやく会社で休みがもらえたから、明日にでも両親に顔を見せられる——そんな現実逃避のうそ物語を、ベッドの上で一人抗がん剤の点滴を受けながら、にやにやししながら夢想していたに違いない。久しぶりだなあ、随分と痩せたから、みんなびつくりするだろうなあ——そうやって実現することの決してない物語を思い描きながら、目から涙が一つと流れ出る。どうして眠れないの？ 早く眠ってしまいたいのに、早く夢が見たいのに——そう思いながら。

きつとそんなところだろう。私は複雑な思いがする。それで姉は幸せだったのか？ 一貫した頑なさとは裏腹に、ほんの僅かな勇気がなかっただけなのではないだろうか？ しかし、死の淵にいる人へさらに苦痛を求めるのは酷なことなのだろうか？ 罪なことなのだろうか？ 私にはもう分からない。

ともかく、姉は死んだ。私の姉・甘利諭美は死んだのだ。

その後も私は暇を見つけては三善君と二人で実家に帰り、両親の心のケアにあたった。その際、もちろん私の当てずっぽうな説は言わないでおいた。姉の夫が言ったように、姉が真相を隠し通したのはあくまで心配をかけたくなかったから、親不孝に耐えられなかったから、としておいた。幸い両親は硬くそう信じていた。

両親はいつまでたっても呆れるほどよく泣いたが、別れ際はいつもすっきりとした笑顔を見せてくれた。そして、他人の家へ勝手に連れ回され、よその家のしんみりした場面ばかりを見せつけられて、三善君には本当に申し訳ないことをした。だが、そこから何かを学んでくれたはずだ、と私は信じる。

* ピッチャー交代

それにしても、私にとって姉の死の影響は想像以上に大きかった。

私は今でも姉の末期の生き様に疑問を呈している。あれでよかったのか？ 幸せだったのか？ しかし、命懸けで自分のガンを親族に知らせないという生き方を選んだ姉のことを、そのように軽

々しく悪い方へ考えるにつけ、何だかひどく罪悪感が湧いてくる。けれどもそう思ってしまうのだから仕方がない。私は拭えない罪悪感を背中に背負って悶々と生活を続けた。

そして月日が経つにつれ、私はますます分からなくなってきた。果たして姉は親族に知らせないでおくべきだったのか、知らせるべきだったのか。もちろんどちらが結果的に良かったのかは分からないし、結果論はこの際どうでもいい。問題は、どちらが正しかったのか——どちらが残される人にとって、そして死にゆく人にとって、納得のいく選択だったのか、だ。

この問題は、本来の領分を超えて、私をわけもなく漠然と不安にさせた。死にゆく人が全能なら、残される我々は一体何なのか？ 心配させない——それは絶縁の体のいい言い換えではないか？ 三善君の言う「見捨てられる」とはもしやこういうことなのか？

そして、側には三善君がいた。

ピッチングの上手い木訥なこの少年の存在が、どれほど私を支えてくれたことだろう。私にはよく分からないが、これが世間で言う、子供を持つということの喜びなのだろうか。私にはよ

しかし私は時々空想する。三善君は、もし両親が仲直りをして息子を引き取りたいと言ってきた時、果たしてどちらになびくだろうか？ やはり血の繋がった両親のほうだろうか？——私はあるもしないことを心底恐れる。どうかしている。だが、本当に怖いのだ。

こんなことも考える。もしも三善君がガンになったら、残される私は一体どうなるのだろうか。

三善君は若いから進行も早いだろうし、もうあつという間にステージIVまでまっしぐらだろう。全身転移で苦痛が体を痛めつけ、モルヒネなしにはもう正気を保てない。そうなつてしまつたら、私はどうなつてしまうのだろうか。彼にかつらを被せるのだろうか。私はきつと、どうかなつてしまふのだろうか。今だつておかしくなっているというのに。私は未だに、姉の死を悲しむことができなideている。痩せ細つた死体をこの目で見ててもなお、実感が持てないのだ。今の私はどうかしている。そんな時、三善君がリビングを歩いていてだけで救われる気持ちになるのはどうしてなのだろう。

今では私はリビングのあるこの部屋にすっかり馴染んでいる。一人ぼつちの狭い部屋で二十年以上も暮らしてきたなんて、今となつてはまるで信じられない。あの生活にはもう絶対に戻れない。つい数ヶ月前までは平然とそうしていたにもかかわらず、だ。私の中で、何かが確実に変わつてしまつたのだ。

姉も結婚あるいはガンを境に、何か自分の中のコアな部分のがらりと変質してしまつたのかもしれない。我々家族の理解していた姉はその時点でもう、地球上のどこにもいなかったのだ。そしてもはや後戻りもできなかつたのだ。だつたら前を見るだけだ。姉はきつと前を見て生きたはずだ。

発病後は特に——終点を見ずえて。

煩悶を顔に出さないように気をつけてはいたのだが、その日はうかつにもそれが顔に出ていたの
だろう。私はいつものキャッチボールのことがすっかり頭から抜け落ちて、ちやぶ台に肘をついて
ぼーっとしてしまっていた。

すると、三善君がキャッチャーマスクにキャッチャーミット、そして防具をつけて私の前に立つ
た。

「行こよ、行こよ」

私は状況が掴めないまま、下から上へキャッチャー姿の三善君を眺めた。

「おお、思っ切り、投げる。す、す、すきーつと、する」

私は涙が出そうになった。

「今日は私がピッチャーかい？ 気を遣ってくれてありがとう。言っておくけど、私はとんでもな
くノーコンだぞ」

「さ、行こ、行こ」

私は三善君のミットめがけて、無心で五〇球を投げた。一球もストライクにはならなかった。三
善君はしなやかにジャンプして捕球したが、ノーコンがひどすぎて捕れない球も多かった。「オー
ライ、オーライ、甘利さん」キャッチボールをしている時の三善君はなぜかほとんど言葉につかえ
ない。

本当に思い切り投げた。最後の方には手にまめがいくつかできた。気持ちよかった。三善君の言った通りだ。

「ひー、疲れたー」

「ぼぼ、僕も疲れた。甘利さん、ほんと、ノーコン」

「私は嘘はつかない。あははは」

私は三善君の肩に腕を回し、笑いながら金網の敷地を後にした。

何かに夢中になっている時、そして側に大切な誰かがいてくれる時、それがピッチングでも闘病でも、人は幸せな放心状態になれるのだろう。そして、誰にも邪魔されたくない、と思うのだろう。私は姉の気持ちがよくやく少しだけ分かった気がした。姉は夫との幸せを誰にも邪魔されたくないから、思えば簡単な答えじゃないか。邪魔者扱いされた我々家族はいい気はしないが、姉がそれで幸せだったのなら、大いに許そうじゃないか。四十九日の時に親に話してみようか、きつと寂しがるだろうな、やつぱりやめとこう、と私は思った。

それから何度か、姉のことで塞ぎ込むことがあった。そんな時は三善君にキャッチャー役をお願いして、思う存分投げさせてもらった。

* 姉の初盆前夜

姉が亡くなって最初の八月が来た。初盆は間近だ。

今年の姉の夫は大忙しだろう。私は七月に「何か手伝えることがあれば仰って下さい」と電話で伝えた。しかし距離が離れているのと、会社勤めで休みが取れないのを先方もよくご承知で、「いえいえ、お言葉だけでありがたいです」と穏やかに答えてくれた。

私は話のネタに、実家に残っている姉の子供の頃の絵でも持つて行こうかと思った。しかしすぐに、姉には子供がいなかったんだ、と気づき、やめにした。子供のことはもしかすると、デリケートな類の問題なのかもしれないからだ。

そこで代わりに、発病前の健康な成人女性としての姉の痕跡を思い出そうとしたが、私には何も思い出せなかった。割と派手好きの姉は自覚して目立とうとしていたわけではないのだが、自ずとそういう見た目になってしまい、そのせいで子供の頃にはよく「生意気だ」といじめられた。そんな経験があるので、姉は外面はともかく内心ではびくびくとした子供になった。それは大人になっても引き継がれ、姉は何かにつけ引つ込み思案で、それが周囲には消極的・非協力的だと映ってしまつたため、偽りの華やかさを見せつけてごまかす技を身につけた。それが姉の鎧だった。だから舞

台絵のような華やかさの他はとかく印象が薄いのだ。

初盆の案内状は七月中に届いた。私は早速「出席」に○をつけ、何かひとこと書こうとしたが、何を書いていいのかさっぱり思いつかなかったので（姉の夫が立ち直っているのかどうかも私には分からなかった）、冷たいような気もしたが空白で投函した。

私は職場を休みにさせた三善君を連れて、十二日に現地へ向かった。鬼頭家の家屋は田舎の庄屋を思わせるとても大きな家だったので、どうぞうちに泊まって行って下さい、という申し出に私は素直に甘えることにした。最初、私は姉の墓参りが済んだらすぐ帰るつもりだったのだが、

「十六日の灯籠流しが幻想的でとてもきれいですので、よろしかったら是非」

と言われたので、これも言われるがまま参加させて頂くことにした。そう、田舎の人のお誘いによく対応しているのかが私には全く分からないのだ。それはともかく、まあ初盆くらい長居させてもらってもいいか、という気持ちと、姉の嫁ぎ先とはこれまで縁を持っていなかったし、姉の話も聞きたいしな、という気持ち私の背中を後押しし、結局五泊六日もお世話になることになった。もちろん私の両親も一緒だ。だが、もう七〇を過ぎているし、疲れて倒れやしないか、少々心配ではある。

「とりあえずは荷物を置いてお風呂にどうぞ」

と、我々二人は鬼頭家に着いた早々に言われたので、いつものように言われるがまま荷物を奥の小部屋に置き、順に風呂に入つた。一緒には入らない。十四歳、毛の生え始めの頃というのは人に見られるとたまらなく恥づかしいものだからだ。

先に私が入つた。三善君は若いのに長風呂だからだ。

私は家の大きさに比例した大風呂を勝手に期待していたのだが、風呂はきわめて普通のサイズだった。それが私に奇妙な印象を与えた——ここも他と同じ家庭のひとつなんだ、と。全く別の家庭に自分がいま包まれているのかと考えると、とても不思議な感じがした。

私は風呂から上がつて奥の小部屋で着替え、途中で買ってきた酒酔い対策の牛乳とウコンのドリンク剤を飲み、いざ大部屋に入ると、

「まずはビールをどうぞ」

と言われたので、これも言われるがままビールを飲んだ。私はかなりの下戸なのだが、田舎の断り方を私は知らない。ところで、この、旅館の女将のような中年の女性は一体誰なのだろうか？ 四方八方知らない人ばかりだ。

「妻は、笑つて悲しむ人でした」

田舎はともかく酒だ。私は姉の夫と酒を酌み交わしながら（日本酒は根性で乗り切つた）、二人

で姉の在りし日に思いを馳せていた。三善君は、姉の夫の親戚の子供達とトランプをして遊んでいた。

「姉は子供の頃、いじめられっ子だったんです。それをカムフラージュするために、笑顔の仮面を身につけたんです。だから、ある種、笑顔が現れた時、ああ、嫌なことがあったんだなあ、と私や母は思ったものです。そして我々は気付かないフリをしていました」

「それ、分かるような気がします」

「論美はねえ、悩み事の相談をちつともしてくれないんですよ。お父さんに似たのね、きつと」母が割り込んできた。飲み慣れないせいかな、もうかなりできあがっている。私も人のことは言えないが。

「そうだよ。俺が『克己心』とか下らねえこと吹き込んだせいで、可哀想に、つらかったろうに、おいおいおい」父は泣き上戸だ。こちらもすっかり完成している。家族揃ってギャグのように下戸なのだ。

「いいえ、お父さんが何も仰らなくても、論美はあのような人間になっていたと思いますよ」と姉の夫が言った。

「なぜでい？」と私の父。

「論美は生まれながらに誇り高いんですよ、毅然と、美しくあろうとしていたんですよ。また逆に、

妥協を重ねた、弱虫の、美しくない自分というものが許せなかったんですよ。だから最後まで……」姉の夫も感極まってしまった。闘病生活が頭をよぎったのだろう。

「まあ一杯どうぞ」こういう時は何はともあれ酒だと思ひ、私は姉の夫に盃を勧めた。

「あ、ありがとうございます。すみません、お見苦しいところを」

「姉の誇り高い、我慢強いところが好きだったんですね」

「ええ……」姉の夫はティッシュで鼻を三度かんだ。「あんな女性、二人といません。諭美は不幸でしたが、私は本当に幸せでした」

私は飽きもせずトランプ遊びに興じる三善君をこつちへ引つ張つてきて姉の夫に言った。

「ご面倒でなければ、旦那さんの親族の方を紹介してもらえないでしょうか」

すると姉の夫は「ええ、喜んで」と快諾してくれた

家の中には三十人くらいの人が長机で寿司を食べ酒を飲んでいた。我々は机をちよこちよこ回つては「こちら、諭美の弟さんの甘利銈介さんと里子の三善乙彦君です」と紹介された。三善君のことは「里子」としか言いようがなかった。

紹介の席では、姉が悲劇的な死に方をしたせい、私までひどく哀れがられ、両手を握られ「諭美ちゃんの分まで生きるのよ」とか言われたり、「諭美さんは、諭美さんは……」と泣かれたりし

た。みんな自分の感情に正直でいい人ばかりだった。まどろっこしい姉とは違っていた。

うっ、と三善君が吐くような声を出したので、私は何かと思つて俯き加減の三善君の顔を見ると、驚いたことに三善君はぼろぼろ泣いていた。どうした？、と私は耳打ちすると、

「ごっこ、こんな、愛された人、はは、初めて……」

あとは、ううう、と嗚咽をこらえるばかりで、言葉が続かない。

三善君はよほど醜い人ばかりの中で育つたのだろう。そして、誰からも損得なく愛される人なんてあり得ない、と思つていたのである。その、あり得ない人が、どうして若くして死ななければならぬのか？——そう思つたのだろう。

「兄ちゃん、諭美のこと全然知らんのに、こんなに泣いてくれるなんて、諭美も幸せ者だなあ」とその場にいた父が言うと、そうだそうだと酔つた数人が相づちを打った。

私がトイレに立つた時、誰もいない別の大部屋に盆棚が設営されているのが見えた。私はそつと入つてみると、盆棚には白い布が敷かれ、位牌が並んでいた。盆棚の両脇の盆灯籠は淡い緑色の光を真つ暗な部屋に放つていた。

その盆棚にはなぜか、姉のスナップ写真が入つた写真立てがひとつ、ひっそりと飾られていた。それは結婚式の時のふくよかな二十代の姉だった。私はやるせなくなつて、姉の写真に長い間合掌

した。

「そこにおいででしたか」目を開けて後ろを振り返ると、声の主は姉の義父だった。

「諭美さんがうちに来た時は、コロコロとかわいらしくて、田舎の生活に必死に慣れようと奮闘していましたよ。それが過ぎて、家族の中で諭美が一番田舎くさいと言われてね。楽しかったですよ。華がありました。諭美さんが家族の輪に入るだけでもう、パツと明るくなるんです。これは生まれ持ったものでしょうな」

「話していると、皆さんからも愛されていたようで」

「そう思いたいところですが、そんなことはありません。弟さんには言いにくいことですが、諭美さんをよく知らない意地の悪い人たちは、あの嫁は子供も作らず病気で家事も畑もせず、などと平気で言いまわっているのが実情なんです」

「……」

「田舎は何につけ海千山千なんですよ。うちのせがれも酷すぎる陰口には随分心を痛めていたんですが、諭美さんに較べれば何てことないよ、と。そんな十年でした」

私は言おうかどうか迷ったが、思い切つて言うことにした。

「私は、二人は幸せだったと思うんです」

「おいおい君、あんな不幸はないぞ。いくらあなたでも言っていないこと……」

「ちょっと聞いて下さい。姉は確かにガンでひどい目に遭いました。これは不幸です。そして皆さんにも多大なご迷惑をおかけしました。これも不幸です。最期には姉は苦しみの果てに夫を置いて死に逝きました。これも大きな不幸です。不幸ばかりです」

「そうだ、いや、そうです」

「しかし、姉は一家の皆さんの嘘偽りない愛情を無尽蔵に受け、末期ガン患者として受けられる最高の幸せを享受していました。そして旦那さんも、姉から命懸けの愛情を受け取ることができました。形にはなりませんが、これは『幸せ』と呼んでいいのではないかと僭越ながら私は思うのです」

「そんな話、誰から聞きました？」

「私の勝手な推測です」

「見も聞きもしないことがよくお分かりになりますなあ」

「姉が死ぬまで、我々家族は、姉はキャリアアウーマンとして元気に働いている、と思っていたのです。つまり姉は、我々には邪魔されなくなかった、立ち入ってきてほしくなかったのです」

「そりゃまあなんと！」

「旦那さんの話によれば、なんて親不孝なことだと気にしていたようです。でも、姉はそれくらい旦那さんと皆さんが好きだったのです」

「それは、遺族としてはお辛いでしょうに……」

「これはここだけの話にしてもらえないでしょうか。うちの親はもう老齢ですし、自分の娘に見捨てられたと知ったら倒れちゃうんじゃないかと思えますので」

「分かりました。今の話、しかと墓場まで持って行きましょう」

「ありがとうございます」

姉の義父は立ち上がって部屋をすつと出て行った。

いい家族だ。

それに較べ、死の淵で短い生涯を懸命に生きた姉を罵倒する非道な連中ときたら、一体何という言い草だ、と私は姉の義父の話を思い起こし、怒りに震えた。私は、姉貴、辛かっただろう、と写真に向かつて呟いた。

しかし、私の心がどれだけ怒りに支配されても、私の背後に「島」は現れなかった。私を包み込みもしなかった。

やはり、本当に私は「島」に見捨てられてしまったのだろうか？ それとも、私との間に距離が、壁ができたのだろうか？ それとも「島」は閉ざされてしまったのだろうか？

宴はぐだぐだと続いていたが、夜も遅くなり、私のか弱い肝臓も限界に達したので、我々は両親

共々お暇を請うことにした。

我々が奥の畳の小部屋に入ると、既に布団を四枚敷いてもらっていた。畳の匂いと洗濯糊の甘い香りがした。私は両親にウコンのドリンク剤と胃腸内服液を渡して飲んでもらった。私も同じものを飲んだ。寝ゲロは何としても避けねばならないからだ。

それにしても、畳の部屋で寝るのは何年ぶりだろう。実家に帰って以来だ。

本当に畳は世の中から減ってしまった。悲しいことだ。昔の悪党は、畳の上で死にたい、と言っていたらしいが、未来の悪党は、フローリングの上で死にたい、とでも言うのだろうか。

我々は寝間着に着替え、パリパリの真つ白いシーツに潜り込み、「消すよ」と言つて照明を消した。

今日はもう何も考えたくない。

* 初盆初日

自然に目が覚めた。鳥の声のせいかもしれない。

体を起こしてみると、隣に三善君の姿はなく、布団が不器用にぐしゃつとたたんであった。そし

て、私の枕元には見慣れた無印良品のメモ用紙で

「気持ちがいいのでさんぽに行つてきます。七時ごろもどります」と寝起きにもかかわらずいつものきれいな字で書いてあつた。

私はふすまを開け縁側に出て、アルミサッシの大きな窓枠を静かに開けると、外は緑の香りがほのかに立ちこめ、緑の中に薄いもやがかかつていた。どこかで小鳥が盛んに鳴いている。確かにこんな自然ゆたかな空間を散歩したらさぞ気持ちがいいだろう、と思つた。

私も気ままに散歩してみたが、老齡の親のことがあるし（きつとくたくたに疲れているだろう）、姉の夫やその家族から呼ばれることも考えられるので（田舎は朝が早い）、表の広場辺りに出るだけにした。

広場には車が何台も停まっている。遠方からの来客の車だ。そこをすり抜け道に出ると、道をはさんだ向こうの畑で、姉の義母がしゃがんで何かしている姿を見つけた。私は行つてみることにした。

「おはようございます。朝から精が出ますね」

「あらあら、論美さんの弟さん。昨日はよく眠れなかつたのかしら？」あらあら、と言つた割には少しも驚いていない。大した人だ。

「いえ、お酒のおかげでぐつすり眠れました」

「あたしもよ、うふふ」

「何をなさっているんですか」

「草取りと、精霊馬しょうりょうま、あのおナスやキュウリに爪楊枝を刺して作る動物ね、あの材料がないか探しているの」

「あれ、精霊馬って言うんですか。初めて知りました」

「正確にはお馬さんはキュウリのほうね。まあそんなことどうでもいいんですが、とつてもかわいいですよね、あれ。だから子供達にと思つて」

「草取りなら手伝いましょうか」

「いいのいいの、家の中にいると体がむずむずするので畑に来てくれるだけですから」

「畑の中を散歩してもいいでしょうか」

「どうぞどうぞ、蚊が多いから気をつけてね」

確かに蚊は多かった。尋常ではなかった。姉の義母は蚊よけの何かを身につけていたのだろう。そういえば肌の露出も少なかった。一方、こちらの格好ときたらTシャツに半パン、それにサンダル履き。もうどんだん刺して下さいと言わんばかりの姿だった。田舎は虫天国だということがすっかり頭から抜け落ちていた。

「ちょ、ちよつと、すごい蚊の数ですね」

「その貯水槽からボウフラがむくむく湧くんですよ。うふふ」

「いやー、畑の散歩は一旦諦めます」私はあつという間に、足の甲からふくらはぎにかけてヤブ蚊にすつかりやられてしまった。

「田舎はね、色んなことを知らないといひどい目に遭うんですよ」姉の義母は畑から逃げる私に意味深な言葉を残していった。

家に戻ると、まだ六時半くらいだったので家人で起きている人はいなかった。

私は奥の小部屋に戻り、ぷくぷく腫れた足を見ながら痒みに必死に耐えていた。うかつなことに、キンカンもムヒも持つてこなかったのだ。しまいには脂汗が出てきた。

ふすまの向こうで人の歩く音がしたので、私はすぐにふすまを開けた。すると先ほどの姉の義母だった。一汗かいて気持ちよさそうな様子だった。

「あの、すみません。虫さされの薬を貸してもらえないでしょうか」

「ああ、それならその救急箱に入っていますから、ご自由にお使い下さい。まあおやおや、随分と派手にやられましたね。うふふ」

「そうなんです。我慢してたら脂汗出ちゃいました」

「脂汗ですって？ うふふふ、ふお、ふお、ふおーほほほほーっ、ひーっ」私の無様な様子に姉

の義母は笑い転げたのだが、その声が何だか妖怪のようで、私も「うはははうあつふあ」と大笑いしてしまった。

玄関の引き戸が開く音がした。三善君だ。

「おう、楽しかったかい」

「たまた楽しい。でも、か、か、か……」

「蚊に刺されまくったんだな」

「そうだ」そう言う三善君は何だかやんちゃ坊主のようだった。

「私もだよ。壊滅的打撃を受けてしまった。今日の誑経が恐ろしい」正坐していると足が圧迫されて熱を持ち、きつと恐ろしく痒くなるんだろう。正坐で静止していられるか？ 多分無理だろう。しかしヤブ蚊だから痒みも今日までだ。根性でしのごう。

「これ塗りな。借り物だから大事に使えよ」

「うん」

「今日はお経をあげるんだ。もちろん我々はじつと正坐をしてなくちゃならない。小さな痒みは根性で耐えろ。でも、どうしても痒みに耐えられなくなったらトイレに行くふりをするんだ。いいな」

「わかた」

もうすぐ読経が始まるというので、家の人は慌ただしく準備をしている。参列者は既に盆棚の前に座り始めている。

子供も準備に忙しい。小さな子も大きな三善君も一緒になって、黙々と色んな精霊馬を色んな野菜で作っている。足がムカデのようであったり、野菜が二つ合体してモンスターになっているものもある。それでも姉の義母はとやかく言わない。できあがったものはムカデもモンスターも盆棚の上に並べられた。

そして、笑ってしまったのが、アロマキャンドル。

「迎え火はお部屋の中で、ラベンダーのアロマキャンドルにしてね。焚き火の出来損ないみたいなやつだと来てやんないから」

というのが生前の遺言のひとつらしい（ちなみに送り火は打ち上げ花火にして、とのことだったが、「それは無理。だったら帰らなくていい」と夫は返事をしたという）。

そのため家の中は終始ラベンダーの香りに包まれていた。なぜラベンダー？、なぜアロマキャンドル？、という参列者からの当然の質問には、姉の夫がいちいち丁寧に答えては、その場に明るく笑いを起こしていた。

このラベンダーにはお坊さんも驚いたようだったが、あくまで平然を懸命に装っているように見

えた。クスクスとあちらこちらで失笑が漏れる。

長い読経は地獄だった。私は途中「トイレ」に一回立ち、奥の部屋で思い切りヤブ蚊の刺した跡を血が出る寸前まで搔いた後、家の人から借りた塗り薬を塗って再び読経の場に戻った。

一方、三善君は三回も「トイレ」に立った。しかも三回目には「トイレ」に行つたきり帰つてこなかった。まあ、まだ子供だ、こんなもんだらう。

あとは昨日と同じ、ぐだぐだの宴会だ。昨日いなかった人は挨拶回りで忙しい。そして、みんなで旧交を温め合っている。実にほのぼのとした光景だ。

しかし、これを額面通りに受け取つてはいけない。中には論美を今でも罵倒している輩が混じつてはいるはずだ。だから論美は、何も考えずに、他人の雑言を捨て、自分の信じる人だけをひたすら信じ、その愛情の中に閉じこもつたのだらう。いや違う。何も考えないなんてできないし、人の陰口は心にグサリと突き刺さる。だから我々一家を盾にして、親密な輪を強固にしたのだ。そしてピュアな愛情を信じることにのめり込んでいったのだらう。もつともつと、幸せの中へ。そうでもしなければ、死の際にいてもなお明るくなんか振る舞えないはずだ。

ここは田舎だ。人付き合いは濃厚そう。表面的には閉じた秩序がある。しかし、未だ足りない、と三善君なら言うだらう。私もそう思う。我々が求めているのは、もう一段、それもとてつもなく深く強固な秩序なのだ。泣き、笑い、怒り、恨み、それでも揺らぐことのない「秩序」。

私は三善君の言葉を借りて「秩序」と言ったが、それはもはや秩序という狭い概念に収まらないのではないか？ 敢えて言うなら「ほんとう」、ほんとうの命の営みだ。姉は死ぬまで我々に嘘ばかりついてきた。しかし、それは「ほんとうの命の営み」だったと言えるかもしれない。

三善君に姉を会わせたかった。

* 初盆四日目

姉の霊にも鬼頭家の皆さんにも申し訳ないが、私はもう飽きてしまった。早く灯籠を流して帰りたい。逆に三善君は子供達と日に日に仲良くなつて楽しそうだ。いい気なものだ。

私は一度、子供達が集まっているところへ歩み寄つて、

「おじさんも一緒に遊んでいいかなあ？」

と尋ねてみたのだが、

「ダメ、お兄ちゃんがしゃべれなくなるからダメ」

と、こつぴどく断られてしまったのだ。

まあ私のことはともかくとして、小さな子供達の言い分によれば、子供達の間では三善君は普通

に話せている、ということになる。もしそうだとすれば、これはとても驚くべき、喜ばしい、奇跡のような出来事だ。なのに三善君はニコニコしているだけで私には何も言わなかった。

今日は朝からみんなが総出で湖に浮かべる灯籠を組み立てていた。灯籠は二〇センチ四方の四角柱で、柱は細い黒、側面は磨りガラス。ガラスには文字や文章や絵が描いてあり、中に大きめのろうそくを立てて燃やす仕組みになっている。組み立て方は簡単で、土台に柱を立てて枠を作り、ろうそくを立てて、枠の溝にガラスをはめ込んで蓋をするだけだ。それをプチプチ（エアキャップ）で包む。慣れた人なら一分もかからない。そして多くの人は慣れている。

姉の灯籠を見させてもらった。姉の分は当然ながら真新しく、側面には「鬼頭論美」の名と戒名それに手書き風のハートマークと「しあわせでした／＼ありがとう」という字が描かれていた。全部本人の希望だという。しかも姉の灯籠だけは大きな台がついていて物が載せられるようになっていた。これは初年度だから特別仕様なのだろう。私が見終えると、灯籠はすぐさまエアキャップに包まれた。

それにしても、灯籠の数、すなわちご先祖の数が半端じゃない。きつと、ひいひいひいひい爺さん婆さんの分まであるのだろう。

お昼には縁側に大皿に盛られた巻き寿司と御稻荷さんが出され、それをみんなで頬張り、車を運転する人以外は缶ビールを飲んでいた。下戸の私には、よくもまあ連日ビールで飽きないものだ

呆れてしまつて何も言葉が出てこない。

全ての灯籠が包み終わると、灯籠は数台のワゴン車に乗せられて先に湖へ走つて行つた。湖でも準備があるからだ。残された人々はまた缶ビールを飲み始めた。そんなにおいしいものなのか、私は大いに疑問に思う。

陽が落ちてくると、みんな自宅へ戻つたり広場に置いた車に乗り込んだりして、灯籠流しの行われる湖へ三々五々と向かい始めた。我々一家三人と三善君は、姉の夫が運転するワゴン車に乗せてもらった。姉の義父と義母も同乗している。

その姉の義母で思い出したのだが、虫さされの薬を借りてくるのをすっかり忘れてしまつていた。まったく、何とかつなごうだろう。これが会社の部下ならきつく叱つていたところだ。でもきつと、誰か一人くらいは虫除けスプレーを持っているだろう。そう期待したい。

「きれいで敵かなんですよ。僕は普段は霊なんて全然信じていないのに、この灯籠流しの時だけは、霊や霊界つて本当はあるんだ、つてごく自然に思つてしまいますもんね」

姉の夫ががたがた道を駆けながら話しかけてきた。しかし私の頭の中は蚊のことでいっぱいだつたので、私は「そうですね」とだけ言つて、それで会話は打ち切られてしまつた。全くひどい奴だ。車内はエアコンをかけていたので閉め切つていた。そのせいで、次第に車内がビール臭くなつて

きた。

「ちよつと寒くなつたので窓を開けてもいいですか」

「どうぞどうぞ遠慮なく。設定温度が低すぎましたかねえ」

「いえいえ、ただの寒がりなだけです。気になさらないで下さい」

私は窓を全開にした。夏の湿つた熱風が塊のように入つてくる。そして十秒後に窓を閉めた。おかげで車内は暑くなつたが、ビール臭は随分和らいだ。

途中、車はディスカウント酒屋に停まつた。そして姉の夫がひとり車を出て店の中に入つてゆくと、しばらくして二十四缶入りの缶ビールを二つ両脇に抱えて帰つてきた。そしてハッチバックを開け、氷の入つた巨大なクーラーボックス二つにビールを入れるだけ入れた。やはり灯籠流しでもビールか。まつたく、田舎の世話人は大変だ、と私は密かに同情した。

再び車は走り出した。車内はとて静かだ。灯籠流しはこれからなのに、みんなもう疲れている。私は狸寝入りをしながら「島」のことを考えていた。

どうして「島」は私が苛々している時に限つて現れたのだろうか？ 苛々するな、と叱つていたわけでもない。苛々に対し私は何の罰も受けていないからだ。そうではなく、まるで私に苛々してほしくない、と願つているような優しい感じを受けた。「反省を促していたのか？ 懇願していたのか？ そうかもしれないが、今となってはもう分からない。

この、「ほんとう」だけからなる「島」とは一体どういうところなのだろうか？ いや、考えるには及ばない。私はその答えらしきものを夢で既に知っている。三善君に話したそのままで。それを三善君は「秩序」と称した。三善君は何よりも《秩序Ⅱまともな暮らし》を求めていたから、真つ先にそう感じたのだろう。一方の私は「ほんとう」と呼んでいる。そう自然に呼んでしまうのは、私が「まやかし」の中に溺れている、ということの意味しているのだろうか？ しかし、まやかしの中で本気で怒り苛々するのもまた「ほんとう」ではないのだろうか？

ひとつだけ確かなことがある。三善君は自分の親を殴ってしまった時のように、自分が暴発してしまうのを極度に恐れている、ということだ。事実、そのことで心に深い傷を負っている。「島」がもし、三善君が私の中に創り上げたものだとしたら、私が苛々した時にそれを鎮めようと働くとは十分に考えられるだろう。

やはり、「島」は三善君の分身、あるいは三善君そのものなのか？ そして、それは私をコアから変えようとしているのか？

であるならば、どうして「島」は私の背後にすっかり現れなくなったのだろうか？

車は灯籠流しの会場の湖に着いた。一見して、海のように大きな湖だった。既にかなり薄暗い。姉の夫とその両親は準備でどこかへ行ってしまった。

懸案の蚊だが、姉の夫の弟の妻から虫除けスプレーを噴射させてもらうことができた。私には彼女がまるで弥勒菩薩のように映った。名前は覚えていない。

男達はみんなビールを飲み、赤ら顔で談笑している（多分帰りは妻が運転するのだろう）。もう風までがビールの臭いだ。草むらで立ちションしている男も何人かいる。「丸見えだぜ、男つてどうしようもねえなあ」と三善君に言ったら、何も言わずに笑っていた。

女達は何個所かに固まって、こちらもしらふで談笑している。女がハイになるのに酒はいらない、ということか。

湖に集まったみんなはまるで、これから始まる灯籠流しにわくわくするあまり、何か話でもしていないといても立つてもいられない、といった様子だ。その地面には灯籠、灯籠、また灯籠。合図を待っているのだ。

ようやくなのか間もなくなのか、係の人の合図があった。するとみんなはそれぞれご先祖の灯籠を手に持ち、流す地点へ列を作った。そして順番が来ると、中ろうそくに火を灯し、静かに湖へ流した。湖はとても大きいので、緩やかな波と引き潮のような動きがある。人の手を離れた灯籠は、炎を揺らめかせながら、ゆつくりと岸の向こうへ流れて行く。その数は一つ、また一つと増え続け、やがて群れとなった優しい炎が扇状に湖の上を滑ってゆく。これだけの数の人々が、かつて生き生きとこの地に暮らしていたのだと思うと、私は感慨深さに圧倒されてしまう。

もう陽はとつぷり沈んでいた。周囲は何の明かりもない。あるのは灯籠の炎だけ。湖にゆらゆら浮かぶ灯籠は、水面下にも自分の姿を映し出している。この世とあの世のように、あるいは「まやかし」と「ほんとう」のように。

姉の灯籠を流す番が来た。姉のは土台付きで大きかったので、私の両親が二人で流した。土台には愛嬌のある精霊馬が何体か飾られている。それを水面にそつと置き、軽く向こうへ押しやる。その行為は実にあつけなく、ほんの数秒で終わった。しかし両親にとっては、ちゃんと送つてやったという気持ちが生じたのかもしれない。母が「諭美はちゃんと帰りましたよ」と言い、父が無言で頷いたからだ。その様子を私と三善君、そして灯籠に描かれた「しあわせでした／＼ありがとう」という言葉の相手であろう姉の夫が見守っていた。

三善君が私の腕を引つ張つて、灯籠の群れを指さしながら、

「島」

と呟いた。

なるほど、光の浮き島のようにも見えなくもない。いや、確かに島だ。

「幸せそうな明かりだよな」と私が言うと、三善君は「似てる」と答えた。

「何に似ているんだい」

「島」

「そうか、『島』か。そうかもな」

「か、感じ、似てる」

「ひとつひとつの灯火は、家々の窓から漏れる光なのかな」

「うん」

灯籠が湖の先まで流れて行ってほとんど見えなくなると、係の人が「ゴミを片付けて下さい」と言って回った。するとみんな素直にゴミを片付け始めた。ゴミのほとんどはもちろん缶ビールの空き缶だ。そして車が一台、また一台と走り去って行った。

その灯籠だが、翌朝、向こう岸で各人が回収するのだという。

そして、ご先祖を送り終え、役目を終えた灯籠は箱の中に片付けられて、来年の盆が来るまで大事に仕舞われるのだという。

翌朝、我々四人は姉の夫の家人に篤く礼を言い、それぞれの家へ帰った。

寄って行けよ、と両親には言われたのだが、既に休暇は長期間に及んでいたもので、頼むから今は東京に戻らせてくれよ、と私は言った。その代わり、初盆後も両親の心のケアのために何度も頻繁に実家へ帰ったの言うまでもない（おかげでリアルな島には行けなかった）。しかしおつくうで

は全然なかった。それはもしかすると、私の心のケアも兼ねていたのかもしれない。

* 二度目の職場

なんだかんだあったものの、三善君はどうか中学を卒業し、近くの工業高校に入学した。名前を書けば入れるような高校だった。不登校期間が長かったのでそれは仕方がない。ともかくも、三善君はついに高校生なのだ。銀座で子供だった三善君を拾ったのも、今の部屋に引っ越したのもついでこの間のことだと思っていたのに、本当に月日が流れるのは残酷なまでに早いものだ。

しかしその三善君だが、入学早々に一発やらかして即退学になってしまった。三善君は何も言い訳を言わなかったが、きつと屈辱的なことをへらへらと言われてカッとなったのだろう。気持ちには分かる。ただし、最初に相手の頬骨が砕けるほど強く殴ったのは三善君のほうだったので、退学に關しては弁解の余地はなかった。

学校の帰りに、私はケンカの相手の入院先へ謝りに行ったが、部屋へ入るなり、
「啞の親か、あのあーうー野郎め、退学とはいいざまだ、カカカ」

と罵る、顔がミイラのようなこの小男は、確かに虫けら以下の奴だった。同情の余地は全くなかった。だから私は詫びもせずに無言でさつきと帰ってきた。嫌な、汚らしいものを見てしまった、と

というのが素直な感想だった。

この頃、三善君の発話は普通のどもりの人程度にまで改善していた。それは、人と意思疎通ができる、ということを意味している。これは本人にとつても私にとつてもとても大きい。それもこれも、三善君がムーミンの音読を辛抱して続けたおかげだろう。もう「ムーミンコントロール」も「スナフキン」もすらすら言える。しかし「フィリフヨンカ」と「トゥーティッキ」だけはまだ少々怪しい。

しかし、人生においてたとえ「フィリフヨンカ」と言えなかったとしても、三善君には何の支障も悲哀もあるまい。そうして一皮むけた三善君は、今後の自分の考えを打ち明けてくれた。

「ああ甘利さんに、ああ甘えてあかりじゃ、ももも申しあげない。す、す、少しども、お、お、お金を入りたい、とうつ、お思てる。だだから、ら、来年から、てて、定時制の高校に、か、通つて、ね、ひひ、昼間はああ甘利さん、しょしょ職場で、は、働きたい」

私に異論はなかった。当面お金には困っていなかったたので、三善君にお金を入れてもらう必要は全くなかったが、僅かながらもお金を入れることで私への後ろめたさが消えてくれるのであればこれこそ本望だ。

それに三善君の場合、生活の基盤を高校ではなく私の目が届く職場に置いた方がいいような気がする。甘やかすすぎかもしれないが、彼は心に深く傷を負っている。そして、何かの拍子にそれが

怒りとなつて暴発することがある。浅はかなガキの集団である高校では暴発が容易に起こりうることは既に証明済みだ。それに暴発は本人の心をも傷つけてしまう。一方、職場は大人の社会だ。きつと暴発のない、平和な暮らしができるだろう。

三善君の職業人として有能さは、二年前にちよつとだけ働いてもらった時にもう分かっている。それに幸い、板屋さんはまだ働いてくれている。

前回は強引に連れて行つたが、今回はこうして双方の合意の上、三善君は再び私の下で働くことになつた。

「明日からまたうちで働こう」

「あい、あいがとう」

三善君はニコニコ返事をした。

そういえば、私は三善君が怒つた姿を見たことがない。ものすごく怖いのだろうか？ 三善君は以前、両親を殴つた、と私に書いてくれた。思うに、大きな抵抗感を振り切る相当の怒りがなければ親を、特に女性である母親を何度も殴れはしまい。その時の三善君は、きつと何かによつたやうな、恐ろしい形相をしていたのだろうか。そして、暴力を引き留めようとする、まるで金縛りのよくなモラルの重い力をもはねのけて、悲劇的な殴打が下される。やがて親は倒れ込み、そこで暴力

が終わる。そして我に返った三善君は、きつと反動で深い悲しみと恐怖、大きな背徳感に襲われたことだろう。それこそ名古屋から東京まで逃げ出したくなるくらいに。

もう乗りこんでしまった船だ、私も覚悟を決めなければならない。目の前の朗らかな三善君には、まだ私の知らない影の三善君が忍んでいる。そしてその恐ろしさを私は知らない。しかし、それも含めて受け入れるのだ。そんなこと、果たして私にできるだろうか？ でも、私がやるしかない。やるしかないのだ。

翌朝、我々がJブロックに降り立つと、ざわめきが起こった。

「あれ、三善君？」

「大きくなったねえ」

「すげえ久しぶり」

三善君はニコニコしながら、ぺこぺここと「あいがとう、あいがとう」と言っていた。

「へえ、だいぶ話せるようになったんだ」

「お、お、おかげさまだ」

奥から板屋さんがやってきた。

「板屋はん、おはようございます」

「おはよ」

職員が全員揃い、ラジオ体操が終わると、私は円陣の場で言った。

「皆さん、知らない方もいると思いますが、二年前、ちよつとだけここで働いていた三善乙彦君です。彼は吃音だが、とてもきれいな字を書く。どうぞよろしく」

「よ、よ、よおしくおねがします」

そして二年前と同じように私が三善君の頭を持ち、一緒に深くお辞儀をすると、まわりから同じように拍手が鳴った。しかし今度は儀礼的な冷たい拍手ではなく、心のこもった温かい拍手だった。それには懐かしきもあるのだろうが、一番の理由は三善君が肉声でたどたどしくも頑張つて話してくれたからだろう。

私はとりあえず一安心し、頭を上げた。

* 夏の小旅行

三善君は就業早々、職場の同僚の鈴木ら四人が所属する草野球チーム「デリバーズ」のピッチャーに問答無用でさせられていた。

チーム練習は土日で、練習場所がとれ次第、随時行っていた。首都圏でのグラウンドの場所取り競争は熾烈を極めているので、キャンセル待ちの時間帯は早朝、夜間といつでもありだった。だから、先々のスケジュールが立たなくなるのはどうしても避けられない。

しかし三善君はあくまで出勤に融通の利くアルバイトの身分だったので、土日に練習試合があれば職場を休むことができた。ただし、心情的に休みにくいのは事実だ。一方、鈴木らは予め土日が休みになるようにしていた。そして、三善君もそうするように勧めた。

三善君は私に、土日を休みにしたいのだが、と相談してきた。私は少々不安だったが、OKを出した。ただし私の休みは火水のまま。火曜日には美咲と会い、水曜日には洗濯をする。それは私的には変えられないし、譲れない。

三善君は早速翌週から火曜日にも出勤するようになった。そのせいで、三善君は火曜日にしか会えない美咲と顔を合わせる事がなくなった。したがって、火曜日になると私は美咲と二人きりでどちらかの家の部屋にいることになったのだが、これまで三善君が当たり前のようにそこにいたので、我々は欠落感をどうしても拭えなかった。

「あたし達も子離れしないとね」

折に触れてそう口にする美咲だが、一方で、

「三善君がいなくて寂しいね」

とも頻繁に言ったりする。

結局、我々は火曜日に三善君と夕飯を外食するようになった。

梅雨が明けたばかりの頃の、いつもの火曜日のことだった。

「三人でどっか旅行に行かない。一週間くらい。うちの店の店長もだいぶしつかりしてきたし、あたしはOKよ」

「いいね、私も多分大丈夫」

「どこがいい？」

「島」、とうかつにも口にしてしまい私は慌てた。「島」のことは三善君との二人の秘密にしておきたかったからだ。それに、美咲に説明するのは面倒でもあった。

「島？ 屋久島とか？ 三善君は何て言うかな？」

「いや、島はなし。色々不便でもあるし。ただのアウトドアがいいかな」

「山登りとか？ そんなのいやよ。トイレは汚いし、蚊はいるし、自販機には馬鹿でかい蛾がうようよ飛んでいたりして」

「じゃあインドアだね」

話がうまい具合に島から外れてくれたので私はほっとした。しかし、美咲は何か感じているよ

うな気がする。

「無難にハワイってのはどうかな。ラーメン屋もあるし」

「その辺が落ち着きどころかしらね。ハワイも一応島だしね」

三善君のパスポートを急いで作らないと、と私は思った。

「ちよつと待つて」そう言つて美咲は本棚から地図帳を持ち出してきた。見た目はとても古かつた。
「それ、学生の頃の？」

「そう、中学生の頃の。ほら、ゾーリンゲンのところにアーミーナイフのへたくそな絵が描いてある。北海油田のところにはでつかい炎なんか描いてて、ドナウ川は赤く塗っちゃつたりして、これじゃ血管じゃない、もうばつかみたい」

「物持ちいいんだね」

「地図帳は特別よ。空想を働かせれば世界中どこだつて行ける、そんな夢の羅針盤——なんちゃつて」

「そうそう、地図帳つてさ、のめり込んじゃうんだよね、変な地名とか探したりして」

「バカ山。インドネシア」と美咲。

「エロマンガ島。国は知らない」と私。

「で、ここがハワイ」

「こんなに遠いんだあ」

「それにしても、なんで日本人ってハワイに行くのかしら」

「みんなが行くからじゃないの？」

「三善君もハワイに行きたがるのかなあ？」

「それは微妙だなあ」

もし行くことになったら、三善君には、華やかなリゾートホテルの陰で貧しい原住民が細々と暮らしている現実を見せてあげたい、と思った。

姉の初盆以来、私に「島」が現れてこない。もう二年近くだ。それだけ苛々させられることが少なくなつたというだけのことなのかもしれないが、本当にそうなのだろうか？

仕事は順調だ。三善君との生活もうまくいっている。美咲と二人でいると楽しい。はつきり言つて幸せだ。しかし、そこに落とし穴はないだろうか？

死化粧をした姉の横たわる姿が不意に思い起こされる。私にはきつと、姉にあつたような何か強固なものが欠けている。私は周囲に流されるままで。それではいけない、と心の奥底から声が聞こえてくるような気がする。しかし、どうしろというのか？

ハワイは私の求める素朴な「島」とは違う。しかし、ハワイだつて一応は島だし、少しくらいは

「島」の面影があるだろう。運がよければ、何か「島」のヒントが得られるかもしれない。そして私は危惧する。今の私は「島」に見捨てられてはいないだろうか——そんな気がしてならない。

* ハワイ旅行の準備

夕食の席では別の話に三人とも夢中になり、ハワイの話は私も美咲もすっかり忘れて出なかつたので、帰宅後に思い出した私は三善君に話を切り出した。

「というわけで、三人でハワイ旅行に行く、という案が持ち上がったんだけど、三善君はどう思う？」

「べ、べつに、かまない」と三善君は漫画から目を離さずに言った。ハワイについては何の関心もない様子だった。

「あはは、そりゃあ美咲が喜ぶ。で、ハワイは外国だから、三善君はパスポートを取得しないといけないんだよ。それで、我々は休みの曜日が別々だから、三善君が休みの日に一人で手続きに行ってもらいたいんだ。なあに、やることは簡単だ。保険証と学生証を持って行く。区役所に行つて戸

籍謄本と住民票をもらつてくる。有楽町の交通会館ビルに行く。写真を撮る。書類を書く。印紙という切手みたいなのを買う。窓口に出す。注意点はお店のセールスに引つかからないこと。それだけだ。できるよな」

「か、か、紙に書かかかないと、お、覚えられん」三善君は漫画から目を離した。

「分からなくなつたら訊けばいい。もう三善君は話せるんだ。訊いても大丈夫」

「それ、すす、少し怖い」

「そりやあちつとは怖いよな。でも、三善君にはそれを乗り越えてほしい」

「うん、わ、わあつた。訊くよ」

日曜日に仕事から家に帰ると、疲れた感じの三善君が床にごろんと寝ころんでいた。

「ただいま。パスポート申請はちゃんとできたかい？」

「うん」そう言つて三善君はちやぶ台を指さした。ちやぶ台の上には申請書の控えが置いてあつた。私はそれをぎつと眺めた。ちゃんと受付印は押されている。

「お疲れだったな」

「ば、ば、ばばあら、汚い言葉、言われた」三善君は怒つてふて寝していたのだった。

『「ばばあ」も十分汚い言葉だけどな。で、ちゃんと我慢できたよな？』

「うん」

「おばさんという人種はな、教養がなくて世間知らずで自分勝手に自己中で傲慢で、もうどうにも始末に負えない社会のガンなんだ。ただ、本人に悪気は全然ないんだよ。だから余計に腹が立つんだけどね。おばさんの無教養、人生経験の貧困さがそうさせてしまう」

「ぼ、僕も、む、無教養」

「三善君は子供だから無教養で当たり前なんだよ。謙虚な気持ちを忘れなければそれでいい。おばさんのように謙虚さを失ったら人間おしまいだ。美しくない。醜い」

「も、もし、もし我を忘れて、な、殴ったりしてしまつたら？」

「私はいつでも三善君の味方であり、理解者でありたいと思っている。でも、それが叶わない時もある。それが答えだ」

三善君が初めて「デリバーズ」で先発する草野球の試合が土曜にあるので、私は有給休暇を取って一人で東京ドームへ観に行つた。あの東京ドームが草野球チームに球場を貸しているなんて驚きだった。

我らが「デリバーズ」は後攻だった。私はバックネット裏に座ると、ロージンバッグを手にした三善君の姿を正面から見ていた。距離はあるが、感覚はキャッチボールの時と同じだ。

投球練習が終わり、最初のバッターへ投げた球は空振りだった。スピードガンには140キロの数値が出ていた。この一瞬で、私とのキャッチボールの時には、三善君はあれでも随分手加減していたことが分かった。私はバッティングマシンで140キロを試したことが一度だけあるが、私には球が白い残像のようにしか見えなかった。そんな球を捕球だなんて、私ごときには到底無理だ。

1、2回は三者凡退だった。しかし3回から相手に当たりが出だした。とりあえずバットにボールが当たり、ボールが前に飛ぶようになった。タイミングを読まれてるな、と私は独り言を言った。キャッチャーも同じことを考えたのか、三善君はセットポジションに切り替えた。すると途端にコントロールが乱れだした。バッターのボールは前に飛ばない。しかし、四球。そして結局は、ワインドアップポジションとセットポジションをランダムに入れ繰り返させて投球する、という変則的な投球を続けることになった。

結局、三善君は9回完投勝利を成し遂げた。驚くべきことに、その間球速はずっと140キロ近いスピードのままだった。凄いスタミナだ。そして彼は、どうもストレートしか知らないようだった。それもある意味凄いことだ。

チームメイトから頭をグローブでポカポカ叩かれ祝福される三善君は、本当に生き生きしていた。これじゃあハワイになんぞに興味が湧くはずもない。

私は、これから始まる打ち上げに飛び入り参加しようかと一瞬考えたが、そこは一線を引くべき

だと思い、すぐに思いとどまった。もし参加するのであれば、よそ者の私は、しかるべき手順をとって入らないと「デリバーズ」のメンバーに失礼だと思った。少々寂しいが、相手の家に土足では上がれない。

そして今日は家で自炊する必要もないので、久しぶりに夜を定食屋で済ませることにしようと思った。これも少々寂しい、というか、侘びしい。そういえば、自分の二十年間の暮らしは、侘びしいものだったんだ、とふと気付いた。当時はそれを愚かにも渋いと思って悦にふけていたのだが、今となつては単に侘びしいだけとしか思えない。独居老人が家で冷めたおかずを一人食べるような侘びしさだ。認識とは不思議なものだ。

私は帰る途中、図書館で「地球の歩き方 ハワイー オアフ島」をバラバラとめくってみた。そこにはビーチやフラやダイビングなど観光スポットが色々書いてはあったが、私の興味をそそるものはひとつもなかった。そして、原住民の住むワイアナエ地区のことは一切載っていなかった。とても地球の歩き方らしくない。でも、とりあえず借りていくことにした。どうせタダだし、三善君が読まなければ返すまでだ。

夜の十時頃、今日のヒーローが帰ってきた。しかし、なぜかしょんぼりしている。

「どうした、元氣ないな」

「う、打ち上げ、辛かたよ。はは話、できん」

「みんな自分のペースでしゃべるからなあ。で、しゃべろうと思っても後から他の人が話し始めて、自分は少しも話せなかった、つてとこか？」

「うん」

「それはもどかしかったな、月曜日に『デリバーズ』の連中が来たらきつく言つとくよ」

「いいよ」

「いいよつて？ みんな楽しそうだったろ、三善君にも楽しくなる権利があるんだ」

「わあつたよ」三善君はしょんぼりそう言うのと、いつもは自室にこもるのだが、今日は風呂場へ行った。一段と長い風呂になりそうだ。

三善君が風呂から上がると、私は「地球の歩き方 ハワイー オアフ島」を手渡した。

「ちよつと見てくんない、これ」

すると三善君は、私と同じようにパラパラとめくってひとこと、

「この島、秩序、ない」

と言って本をちゃぶ台の上に置いた。確かにそうだ。

私は今度は本棚からトーベ・ヤンソンの「島暮らしの記録」を取り出し、三善君に渡してみた。

「三善君はこういうのが好きなのかな？」

三善君は最初の数頁を訝しげに読んでいたが、すぐに没頭していった。

三善君はハワイに素っ気なかったが、行けばまあ何とかなるだろう。

さて一週間の滞在となると、トランクケースは二人分必要だ。またモノが増えてしまう。それに水着も必要だ。カメラもあつた方がいいよな。安いのをひとつ買おう。服と下着と日焼け止めを入れて、あとは現地調達で間に合うだろう。

いい案を思いついた。三善君は休みの曜日が変わってから、美咲との接点で、火曜日の外食を除くと、月に一度のヘアカットの場だけになってしまっている。この旅行は、二人の親睦をテーマにしたい。そして私は二人の案内役だ。うん、それがいい。私はガイド本を読み込んでおかないと。ハワイのことなんてワイアナエ地区のことしか知らないし。

* 試合後の反省会

月曜日、私は鈴木ら「デリバーズ」所属の四名を呼び出し、注意した。

「試合、勝ってよかったな。」

みんなを呼んだのは他でもない、試合後の打ち上げの件についてだ。あの日、ヒーローであるはずの三善君が、人にさえぎられて何も話せなかった、と言ってしよげかえって帰ってきた。三善君は承知の通りきつい吃音だ。人前で言葉を言うだけでも勇気がある。そしてゆっくりしか話せない。本人ももどかしいんだ。だから、その辺を理解してやって欲しい。そして、そのことを他のチームメイトにも伝えて欲しい」

「はい、ていうか、マネージャー、三善君と一緒に住んでるんですか？」

「そうだ。言ってなかったかな」

「言っけない言っけない！」

「まあとにかくそういうことだ。あと、三善君には変化球も教えてやったほうがいいな」

「ええっ、球場にいたんですか？」

「三善君が思い切り投げる姿を見てみたかったからな」

「マネージャーと三善君って、どういう関係なんですか」

「あははっ、それはこつちが訊きたいくらいなんだ。成り行きでこうなっている、としか言いようがないんだ。ま、よろしくな」

「あ、はい……」

お昼休み、いつものようにみんな揃って食事をとった。

「ところで、変化球が分かる人って『デリバーズ』にいるの？」と私は鈴木に尋ねた。

鈴木は隣の斎藤と一緒にニヤツと笑って、

「ええ、分かる人はいます。ただし投げられる人はいません。あはは」

「握力が要るんですよ。でもうちのピッチャーはみんなもういい歳のおっさんばつだから。理論にだけは詳しいんですけどね」

「斎藤は変化球とか捕球できる？」

「うーん、高校の頃は受けてましたけど、今はちよつとりハビリが必要ですね」

「よし、話は決まった」と私は勇ましく言った。「三善君には理論に詳しいご年配のピッチャーが変化球を教える。それを斎藤が捕る。完璧だ。斎藤もそれでいいよな」

「は、はい。……でも」

「でも？」

「三善君の球って、なんか鬼気迫るものがあつて、捕つてて怖いですよ。ゲームを楽しむって雰囲気かケラもない。なんすかねえ、あれ」

「んー、それはよくないな。私からも言っておくよ。彼、ああ見えて喧嘩っ早いんだ。それが出たのかもな」

バイキング用の皿を山盛りにして三善君がやってきた。きよろきよろ辺りを見ている

「おう、こつちこつち」と鈴木は手を振った。パツと顔が晴れた三善君はお膳を持ってやってきて、私の隣に座った。

「いま三善君のことを話していたんだよ。三善君に変化球を覚えさせたいつてね。先輩ピッチャーが詳しいって。あと、斎藤が変化球も捕れるって」と私は言った。

すると、三善君が意外なことを言った。

「か、カーブ、しゅ、シュート、投げれます」

「えーっ、じゃあ、なんで投げなかったの？」と斎藤。

「さ、斎藤さん、怪我する、って、思たっす。しし、審判も、バターも」

「どうする斎藤先生、坊やに見くびられてるぞ」と私はふざけて斎藤をけしかけた。ところが、

「三善君、心配してくれていたんだね。でもオレは高校の頃、変化球もちゃんと捕球していたから大丈夫。カーブもシュートも、あとスライダーもOK。ただしフォークは受けたことがないから分らない。今度の練習の時に投げてみてよ。オレ、楽しみにしてるよ」

斎藤は見事に大人の対応をした。私は驚いた。そして心の中で斎藤に詫びた。

しかし三善君は何が気に入らないのか、うん、と気のない返事をして俯き黙々と食べていた。

「何か気に入らないことでもあるのか？」と私は尋ねた。すると三善君は、「それ、それ、気いらいらんのうよ」と泣きそうな表情で言った。

私のお節介が過ぎたのだ。野球の領域にまで言葉で立ち入るのは今後控えようと思った。

* ハワイ行きについて

火曜日——我々は今日は美咲の店「ミラ」の一号店にいた。順番待ちの客にうれしいハーブティーを出してくれると評判の店だ。店内はほのかにアロマの香りが漂う。床にはよく見かける観葉植物。壁紙は淡いパープル。そんな空間で、私は待合席の赤い革張りの長椅子にでろんともたれてた。

美咲がローズヒップのブレンドティーを作っている。ローズヒップはコーヒーミルで砕くとよく味が出るらしい。

「三善君なんだけどさあ、ハワイ行きの反応、どうだった？」バックルームからティーポットを持って、珍しくカジュアルなパーカー姿の美咲が現れた。

「構わないって言ってたよ」目の前にルビーのように美しく赤いハーブティーが出された。

美咲は自分の分も注ぎ、ポットをテーブルにおいて、「おかわりあるからね」と言った。そして「ハワイ、喜んでいなかった？」と、私の隣に座ってそう尋ねた。

「別に喜んではいない」私は正直に言った。

「なーんだ、じゃあやめましょ、ハワイ行き」そう言うと、美咲は派手に足を組んだ。

「えっ？」私はあまりにあつさりした美咲の態度に驚いた。

「やめやめ、馬鹿らしい。ふてくされた子供とずっと一緒だなんてやだからね」

「それじゃあ美咲はさあ、ニコニコした子供とずっといたかったのかな？」

「そりゃそうよ。こつちまでニコニコになれるじゃない。仏頂面の銚介だつてきつとそうなる

よ」

「仏頂面で悪かったね」そう言うと私は仏頂面を試みたが、気付いてもらえなかった。

「三善君はどこだったらしいのかしら」

「じゃあ野球場だね。上手いんだ、あの子」

「あたし野球なんて全然分かんないよ」

「大丈夫。三善君はピッチャーだから。彼の投げ姿だけ見ていればいい」私はボールを投げる真似をした。

「へえ、チームに所属してるんだ」

「うちの会社の草野球チームだけだね。でも草野球界では強いらしいよ。で、三善君の投げる試合があつたら観に行こう。でも試合があるのは土日祝日だから、その時は休みを取ってね。私も休みを取るから」

「あの子、そんな特技があつたんだ。びっくり。かつこいい？」

「かつこいいよー」

「うわあ、楽しみ。あたし、かつこよくて若い男に飢えているのよね、エロい意味じゃなくて、少女漫画ちつくな胸のときめきが欲しいのよ」

「そうなれるといいね」

私はハーブティーをおかわりした。

「おいしい？」

「すごくおいしい。私の生活にはどこにもない異世界の味がする」

「それって褒め言葉？」

「もちろんさ」

我々は二人一緒にハーブティーをゆつたりとすすった。

「あのさ、ハワイだけどさ」と美咲が話しかけてきた。

「ん？ やっぱり行きたいの？」

「逆よ逆。あれから観光ガイドとか見てちよつと思っただけど、ハワイってさあ、なんか原住民の人が僅かなお金で見世物にされちゃってるようで、ちよつと痛々しいよね、行ったことないけど。ステージで誰も祝福しないフラを踊って、ダンサー達は空しいし悔しいと思うんだ」美咲は意外な、美咲らしからぬことを言った。

「先住民文化も観光商品にされてしまってるし」

「先住民の人は怒らないのかしら」

「怒っているよ。貧民窟に押し込められてさ。小錦の実家もそこにあるんだ」

「へえ」

「リゾート地は世界中どこもそうだよ。大国の理不尽な侵略という暗い歴史がない南の島のリゾートなんてひとつもないよ」

そう言うと、私はハーブティーの二杯目のおかわりをした。

「今日の夜は何食べようか」

「粥の美味しい中国料理屋……」

「はいはい、それはまた今度ね」

* 勉強する三善君

私の職場で働き始めてから、三善君は結構忙しくなった。

まず仕事。そして気晴らしの私とのキャッチボール。ムーミンの音読。そこに新たに、中学の教科の勉強が加わった。定時制の高校に入っても、中学の基礎が分かっていないと何も理解できないかもしれない、だから勉強をしたい、と三善君が言ってきたのだ。これまでは少し間延びしたところのあつた三善君だが、どういう風の吹き回しか、きりりと締まってきたような気がする。「デリバーズ」のメンバーの影響だろうか？

三善君の机は二千円の小さな折りたたみ机だった。しかし、勉強するのならもつとまともな机を用意したほうがいいよな、と思い、ネットで三善君の好きな無印良品の大きな机を買ってやった。これでまたモノが致命的に増えた。六畳の部屋が恐ろしく狭く感じる。

ある土曜日、三善君は都心の本屋で勉強の本を手提げ袋二つ分買い込んだ。もちろん自分で稼いだお金でだ。大したもんだ、と私は思った。

三善君は変わろうとしている。

親との縁を実質的に切ったのが第一ステージだとすれば、今は次のステージへ向かっている。そ

れが何かは私には分からない。その辺を本人にそれとなく聞いてみたのだが、
「ししし、しつかいしなあ」と

と言うだけで、具体的にどうなろうとしているのかは分からなかった。

勉強してしつかり者になるのは構わない。だが、今の三善君は焦っているような、何かに追い立てられていような、そんな気がしてならない。それも「島」の生き方とは逆方向に。私は三善君に本物の「島」を見せてあげられたら、と強く思うのだが、それは叶わぬ願いだ。

それはともかく、ゲームなんかで時間を浪費するよりはずつとました。三善君が参考書の山を自腹で買ってきた日の私はただただ驚くだけだったが、その翌日、私は三善君に私なりの簡単な学習指南を説いた。

「一年足らずの間に中学三年間で習うことを限なく学ぶのは絶対的に時間が足りない。だから効率よくやる必要がある。私の経験から言って、社会と理科はやる必要がない。高校で同じことを始めから詳しく習うからだ。逆に数学と英語はやっておかないとひどい目に遭う。絶対に手を抜かずにやるように。で、残りの国語だが、これはやれば読解力がつき、名文にも接することができるので、心が多少なりとも豊かになれる気がする。それに、小説をより楽しめるようにもなれる。だから心に余裕があればやった方がいい。しかし逆に、心に余裕がないのに焦って国語をやっても何の意味もない。分かった？」

「はい。分かった」

「よし。次に目標を立てることだ。勉強には終わりが無い。きりが無い。だから目標を立てて、そこを終点にしないことには、だらだらと時間を無駄に費やすことになる。私だったら、教科書の各章の末尾にある問題が解けるようになることを目標にする。なぜなら、末尾の問題は学習内容がきちんと理解できたかを計れるよう、練りに練られた手強い問題ばかりだからだ。参考書や問題集は、教科書の問題を解くために利用するにとどめるのが賢明だと思う。分かった？」

「はい。分かった」

「分からないところがあったら、まず自分で調べて、それでも分からなかったら私に訊いてくれ。もう三〇年近く前に習ったことだから忘れていても多いと思うけど、できる範囲で協力したい。以上」

「はい。あいがとう」

三善君は毎晩夜遅くまで勉強していた。私が「もう寝ろ」と言うまで勉強していた。何が彼をそうさせるのかと私は考えてみた。それはきつと、これまででは吃音とトラブルで学校へ行けなくて勉強がでなかつた、しかし本当は人並みに勉強がしたかつた——そういう思いが彼を今、勉強に駆り立てているのだろう。それがなぜ今なのか、という問いに答えるのは簡単だ。今になってようや

く、勉強ができる静かな環境が整い、心も野球チームで活躍したりで平静になれたからだ。

しかし、これはちよつと出来過ぎた話ではないか？ 非難の及ばない落とし穴に、人はやすやすと嵌まり込んでしまうものだ。そこが落とし穴だとも知らずに喜び、それが何かの罠だとも気付かずにのめり込む。

三善君が勉強するのを非難してはいない。ただ、三善君の木訥さが、本来持っている素朴な逞しさが、落とし穴に落ちてしまつて無為に失われてしまうことを危惧しているだけなのだ。

考え過ぎだろうか？ それならいいのだが。

三善君が勉強に没頭する日々が続くにつれて、私は情けないことに、何だかおいてけぼりにされたような、もう必要とされていないような気がして、日に日に心細くなつてきてしまった。そして心細くなると人恋しくなるものだ。美咲は心細くなつたりすることがあるのだろうか。

美咲に関しては「島」と縁があるがなからうが、全然変わりが無いように思う。美咲は「島」を必要とする人ではない。実業家で、現世に没入して、つまりは徹底して陸おかの人なのだ。「島」に連れてこられても戸惑うばかりだろう。

そして、いくら私が人恋しいからといって、安直に美咲を抱きたいとは思わない。願わくば、

「島」を分かる人と「島」を語り合いたい。しかし、そんな人は残念ながらこの世にはいない。

ミルクの香りがする小さな子供ならどうだろう。布団に横になつて「島」を語り聞かせるのだ。そんなこと、独身の私には到底不可能だが、できたらいいな、とは思ふ。

「島」が現れなくなつてもう二年も経つのに、私は未だに忘れられないでいるし、今でも身近な存在だと感じている。三善君はどうだろう？ 二年前に話した時はいたく感動されたが、もう「秩序」が得られて満足しているのだろうか？

そう、「秩序」だ。三善君、今君を支えている秩序はかりそめのものなんだ、永遠に続くものでは決していないんだ、勉強をしても秩序は強固にはならないんだ。勉強に勉強以外のこと——「秩序」——を求めると、逆にバランスが崩れてゆくんだ。そう、三善君は大きな勘違いをしている。しかし、それをどう言えばきちんと伝えられるだろうか？ 秩序の中に喜々として取り込まれている人に。

* 初めての口論

キャッチボールを終え、二人ともシャワーを浴びた後に、私から話を切り出した。

「ちょっと話したいことがある。もしかすると重要なことかもしれない。それはだ、三善君が勉強に没頭しすぎていることだ。端で見て見て異常に映るぞ」

「こここれくらいやらあいと、追い着かない」

「それじゃあじきに息切れしてしまう。無理しても仕方がない」

「こここれが、じじぶんの、ペース」

「それは嘘だ。三善君は普通の人間だ。躁鬱病患者ではない。だから今のペースはあり得ない。きつとやつてる時間の割には頭に入っていないはずだ」

「た、確かにそう。でも、もう馬鹿にされとうない。き、吃音でもう、一生分、ぶ、ぶ、侮蔑されてきた。あ、甘利さんにあ分らない、こ、この、悔しさ」

「そうかもしれない。私にできることはせいぜい分かるうと努力することだけだ。私は三善君が、自分のせいでもないのに馬鹿にされるなんて、とても悔しいだろうと想像する。けどな、吃音と勉強は別じゃないのか？」

「ふ、ふたつは繋がってる」

「吃音だから馬鹿にされる、馬鹿だから勉強ができない、つて繋がるのか？」

「そう、そう、そう」

「賢くなりたんだな、そして馬鹿にする連中を見返してやりたいんだな」

「そう」

「じゃあ無理せずコツコツやることだ」

「そ、それができん。ぼ、没頭してしまう」

「没頭して夢を見るのかな？」

「そう、……馬鹿にされない自分」

「なるほどな、三善君はみんなから肯定されたいんだな、包まれたいんだな、私と美咲と職場の人間だけでは不十分かい？」

「そ、そんなことない。ぼ、僕はただ……」

「ただ？」

「し、しつかいした人間にないただけなんだ」

「早合点するな。世の中、勉強だけできてあととはてんで駄目なわけでなしなんて何百万人もいる。平気で犯罪を犯す者もいる。勉強ができればしつかりなれるわけでは全然ない」

「あ、あ、甘利さんはどうして、ぼ、僕が勉強するのに反対する？」

「やり方が異常だからだ。まるで何かに脅迫されてやっているような感じがする。そして、三善君らしさが損なわれている感じもする。心配なんだ。」

「ま、また、おお、お節介！」三善君は怒号とともに席を立とうとした。

「おい待てよ、逃げるな。とことん話をしようじゃないか」私は三善君の腕を持って引き留めた。

三善君はその馬鹿力で私の手を払うことも容易にできたはずだが、何の抵抗もせず席へと座つた。勉強をしたい、大いに結構。しかし、勉強をすることに飲み込まれるな。自分を見失うな。分からないからつて焦つたら、三善君を馬鹿にする連中の思うつぼだ。三善君は三善君でなければならぬ

「いい、言つてる意味が、分からん」

「ずっと前、私が『島』の話をしたのを覚えているだろう。その時三善君は、『島』を秩序の象徴と読み取つた。覚えているよね」

「うん」

「その時、三善君は丁寧な感想を紙に書いてくれた。そこには、秩序の中に自分を置くことで、吃音が治るような気がする、自分が何者なのかが分かるようになる気がする、というようなことが書いてあつたと記憶している。そうだったよね」

「うん」

「そして今、たまたま三善君は秩序の中にいる。平日は働き、帰宅後はキャッチボールをして、ムーミンを音読し、夜中に勉強をする。休日は野球の練習だ」

「なに、なにが言いたい？」

「もう十分すぎるくらいしつかりしているってことさ。でも、欲が出たんだな。三善君はしつかりしていない連中に騙されているんだ。あいつらを見返してやりたい。そう思つて、三善君は知らず知らず連中の流儀をなぞつてしまう。でも、そんなことしたつて自分が失われてゆくだけなんだ。秩序が壊れるだけなんだ。それこそ連中の思うつぼなんだ」

「ど、どうしろと?」

「勉強するのは賛成だ。ただし、それを武器にしようとか、人格の一部にしようとか、そんなことを思つてはほしくないんだ。勉強はただの勉強で、三善君の人間性を左右するものではないんだ。

三善君を馬鹿にする連中は、それこそ馬鹿だ。だから毅然としていよう。暴力も止めよう。そして、今の秩序の中で得られる喜びを大切にしよう。それを私は三善君に分かつてほしい」

「き、きれいな事だ」

「なに?」

「ああ、甘利さんは、てつてつ徹底的に馬鹿にされた経験、ない。僕、今、ち、秩序の中に収まり、安堵、得られると、人を恨み憎む余裕、出てくるんだ。そそそして、止められないんだ、もう。そういうの、醜い、分かつてる。でででも、駄目なんだ」

「素直に分かつてくれると思つていた。けど、根は深そうだな」

「い、いめん」

「確かに私は、あまり馬鹿にされたことはないし、憎しみを込めて馬鹿にされたことは全くない。だから三善君の言い分を責める資格はない。しかし私は醜い三善君の姿を見たくはないんだ。それは私の思いだけではなく、秩序を構成している「デリバーズ」のみんなや職場のみんな、そして美咲、みんなの思いでもあるんだ。それを裏切り、三善君が醜くどす黒くなってしまう、聞く耳を持たなくなると、やがて三善君は今の秩序から間違いなく排除されてしまう。見捨てられる、と言ってもいい。これだけは分かっているほしい」

「い、今の僕は、醜いか？」

「醜くなんかない。どこまでも正直ないい子だ」

「どど、努力する」

「よく言ってくれた。さつきも言った通り、勉強はただの勉強だ。それを承知している限り、三善君は大丈夫だと思う。醜くなんかならないと思う」

しばし沈黙がリビングを覆った。

「さ、飯の支度でもするか」と、私はわざとらしく言った。私は心の底からは、三善君を信用しきれなかったのだ。

果たして三善君は私の言いつけを守ってくれるだろうか。

というのも、私にとつての「秩序」において、三善君の位置づけがもう取り返しのつかないほど大きくなつてしまつてゐるからだ。もし彼が言いつけを守らず、憎しみに振り回されてしまふようなことになれば、私の中の「秩序」も同時に壊れ、もはや荒れ果てたカオスしか残らなくなる——決して大袈裟な表現ではない。

こんなはずではなかつたのだ。子供の頃、私は大人になつたら、ちつぽけな学校という狭い枠を飛び越えて、日本中、いや世界中の人々と交友を温め、大勢の「ほんとう」の仲間達に囲まれて賑やかに楽しく暮らしている、と思つてゐた。そうなることを当然のように信じてゐた。それが、どこでどう間違えたのか、今じゃこのみじめなザマだ。かつての学生時代の同級生達とは自然に縁が切れ、親戚づきあいや近所づきあいもなく、趣味の仲間もおらず（私には趣味がない）、もちろん外国人など一人として知るはずもない。付き合いがあるのは美咲と職場の連中、そして三善君だけだ。そして「ほんとう」の仲間と呼べるのはたった二人しかいない。寂しいと言えば寂しい。侘びしいと言えば侘びしい。そして三善君の存在は今や美咲を遙かに越え、私の中で大きくなりすぎてしまつてゐる。どうしたことだろう、まだ十代の子供に過ぎないのに。自分でも戸惑つてしまふ。

その三善君も今、次のステージへ行くこうとして戸惑っている。親を振り切ることができた今、自分はどこへ向かって行けばいいのか？、自分は最終的にどうありたいのか？、湧いてくる憎しみは押さえられないのか？、憎しみのせいでせつかくできた仲間達から見捨てられはしないか？、今、自分はどうして吃音なんだ？、自由に話せていた頃の自分は何だったのか？、今の自分は一体どこが間違っているのか？

そんな戸惑いは三善君一人のうちにとどまらず、何倍にも増幅されて私にも伝播してくる。歳を重ねている分、本人よりも余計に分かるのだ。そして正直、今の私はわけもなく不安でたまらないのだ。なのに、こんな時に膝をつき合わせて相談できる人は、情けないことに今の私には誰もいない。これは一体何のつけなんだ？

どうしてこんなことになってしまったのだろうか？ 私としては、大きな間違いを犯さずに、これまで保守的・保身的に暮らしてきたつもりなのだ。だが、きつとどこかで大きなミスを犯したまま、それに気付かず、今に至っているのだろう。そして三善君と出会ったことにより、私はミスのつけだけを自覚させられるに至っている。

……そうだ、「これでいいや」と二〇年以上疑いを抱かずにきたことこそが、私の致命的なミスだったのだ。本当はこれではいけないかった。絶対にいけないと気付けなくてはならなかった。そして、誰のせいでもなかった。自分一人のせいだったのだ。しかし二〇年とは、もう取り返しがつか

ないではないか。今ごろ気付いても、もうどうするあてもない。

ともかく、今さら後悔しても仕方がない。今の私には揺れ動く三善君を頼るしかすべがない。不安の嵐の船中で両足を踏ん張り、じつと耐えてしのぐしかないのだ。

そんな、怯える私の小さな「秩序」を、上から丸ごと包み込む三善君は、私にとつて本当に「島」のような存在だ。そしてその「島」の本体は今、自ら何かに変わろうとしている。しかも、どう変わるのかが分からない。本人にも分からない。であるならば、一体誰が分かるとでもいうのか？

姉？

姉が死んでから、「島」は私の背後に現れなくなった。姉が死んでから今までずっとだ。しかし、私は大きな勘違いをしていやしないだろうか？

思えば姉の死は、私に予想外の激しい動揺を生じさせた。その動揺をひとことと言えば、「ドミノ倒しの後悔」だ。ある誤った決断が、後悔を、不幸を次々と生み出してゆく——そういった悪夢への動揺、一つの決断が持つあまりの重大さに対する怯えだった。

姉の下した決断を断固否定してしまう自分があることは当時、自分でも本当に辛かった。まるで自分が血の通った人間ではないような気がして、頭がどうにかなりそうだった。その一方で、姉を邪険に言う輩達には激しい怒りを覚えた。殴り倒してやりたいほどだった。しかし、そのいずれの

場面にも「島」は現れなかった。なぜなのかは今もって分からない。そして「島」に癒されること
のなかった私は結局、考えに考えた末に、姉は本当に幸せだった、という結論に辿り着き、それ以
後は姉の決断について考えることはなくなった。冒険者達への怒りについても、姉の峻厳な決断の、
その大きさと強さの前にしぼんでしまった。一体、私の考えはどうしてこうも急変してしまえたの
だろう？ 優しい方へと。

そういえば、楽になれたきつかけはキャッチボールだった。忘れもしない、私が初めてピッチャ
ー役をやった日だ。三善君がしょげかえった私にピッチャー役を率先してけしにかけてきたのだ。私
は後日、その時のことを何度も思い出しては、大いに満たされた気持ちになったものだ。

と、ここまできて、私はやつと分かった。私は姉が死んだ日から既に「島」に包まれていたのだ。
最初から「島」に包まれていたので、外部から「島」が出現することはなかったのだ。そしてその
正体は、私の知らない、言葉をすらすらとクリアに話す三善君だったのだ。姉の初盆の時、子供達
と遊んでいた三善君は、子供達が言うには、信じられないことに普通に言葉を話していたという
ではないか。そして、大人の私が遊びの輪の中へ入ろうとすると、しゃべれなくなる、と拒まれた
ではないか。そう、私をはじめ大人たちの手の届かないところに、憎しみから自由で、本来の温和さ
が表に出た、「ほんとう」の三善君はひっそりと住んでいるのだ。そして子供達が幼い頃の三善君
を引き出してくれたのだ。

その、流暢に自分の思いを自由に話せる屈託のない三善君は、私の裏側から、私の盲点から、私の知らぬ間にこっそりと私の中に忍び込んできたに違いない。私に発見されてしまうと吃音の少年に、現実の三善君に戻ってしまうからだ。そして彼は私の見えない「島」となったのだ。

姉が死んでから、私は自力で姉の幸せの境地の理解に辿り着いたと思っていた。しかし、それは私の慢心だった。実際は「島」との共同作業だったのだ。でなければ今でも私は、姉のことを蔑んでいたかもしれない。考えるだに恐ろしいことだ。

それに、私は葬儀や盆を「茶番」だと何度も三善君に言っていた。しかし三善君には分かっていた。「茶番」が「ほんとう」になり得ることを。しかし私の頑迷さが、三善君から私にその事実を伝えるすべを奪っていた。愚かなことをしてしまった。

その、葬儀や盆の「茶番」の中にある「ほんとう」と、吃音に邪魔されて表に出てこない三善君の「ほんとう」が、「ほんとう」の世界で共鳴したのかもしれない。だから、一瞬でも流暢に話す「ほんとう」の三善君が、子供達の前にひょっこりと顔を出したのかもしれない。

私は既に「島」に包まれている——そう考えるだけで、私は不安感が少し遠のいた。分からないことはたくさんある。揺れ動く現実の三善君のことも怖い。しかし、「島」についてはそうはつきりと言いつくれる。

* 勉強依存症

「努力する」と三善君は言ってくれたが、今のところ憎しみの方が遙かに勝っているようだ。三善君の勉強が止まらないのだ。それも鬼気迫る表情で。

私はホットミルクを持って部屋に入ったりしてそれとなく様子を探っているのだが、もう、とりつく島もない。「根詰め過ぎじゃないか」と私が声をかけても、返事はいつも「こ、これ、じ、じ、自分のペース」だ。少しは寝ているようだが、明け方まで起きていたことも度々だった。

キャッチボールもやらなくなった。その分の時間を勉強に費やしたかたからだ。私は「とても残念だ」と言ったが、三善君は「ごめん」と言うだけで、キャッチボールを再開する意志はこれっぽっちもなさそうだった。「私は本当に残念に思っているんだ」と強く出ても結果は同じだった。三善君が硬球を手を持つのは「デリバーズ」の練習の時だけになってしまった。仕事が終わった後もチームメイトとのキャッチボールはせず、そそくさと帰ってしまうのだった——勉強のために。私は「三善君は今、何かに悩んでいるんだ。そう長引きはしないと。すまないが、温かく見守ってやってくれ」と鈴木らには言っている。しかしこの、長続きはしない、というのは単なる私の願望に過ぎない。

ムーミンの音読は引き続き行っている。しかし、前よりつかえることが多くなった。それについて三善君は「も、も、黙読、どどんどん先に行つて、こ、声、追いつかん」とかつて私に言った。私は、「一単語ずつゆつくりと読もうよ」と言つたが、どうにも焦つてしまふらしい。途中で苛々した様子を見せることもしばしばだった。「今は調子が悪いんだ、音読の正確さよりも、物語を楽しもうよ」と私が言つても無駄だった。三善君は読めない自分に腹を立て、焦り、さらに読めなくなる、という悪循環に毎回のように陥つてしまふのだつた。悔しいだろう。もどかしいだろう。私まで心が痛くなる。

私が夕飯を作る間は三善君の風呂の時間だ。その時間も随分短くなつてしまった。

そして夕飯を食べ終えると、三善君は自分の部屋へ直行し、教科書と参考書を開く。そしてシャープペンシルがカリカリ音を立てる時間が延々と続く。私は、これでは体を壊すと思い、卵粥などの夜食を出して、でもこれ以上は付き合いきれないと思ひ、十二時前には自室で就寝する。

雨が降りそうで降らない、湿度が百パーセントに近いとても不快な日曜日に、とうとう私の恐れていたことが起きてしまった。三善君が「デリバーズ」の練習中に倒れたのだ。

意識を失つた三善君は救急車で搬送された。病院から連絡を受けた私は仕事を早退した。そして搬送先の病院に到着すると、三善君は点滴をつけてベッドで横になっていた。

「ただの疲労です。いま栄養剤を打っています。まだ若いので、じきに自力で起きて帰れるようになるでしょう」

私は医師と看護師に礼を言うと、三善君に「今はゆっくり寝ている。話はそれからだ」と言った。三善君は体を小さくして、怯えた表情をしていた。

幸い、我々はその日のうちに帰宅できた。三善君の顔色も普段通りに戻った。私は三善君が怯えないよう、努めて優しく話そうとした。

「三善君の嫌いなお節介を言うようだけれど、保護者としては、倒れられてはもう黙ってはいられないんだ。本当に心配なんだ。最近の三善君は心のバランスが崩れているように感じる。喜怒哀楽の怒ばかりが目立っている。でも、今日はそのことについて私からは何も言わない。自分が今どういう状態で、何をすべきなのか、三善君なら自分で分かっていると思うからだ」

「わ、分からない、な、な、何にも」

「いいや、本当は分かっているんだよ」

まあ飲め、と私は缶コーラ二本とサラミを冷蔵庫から出し、一本を三善君に渡した。

「正式に働き始めたばかりの頃の三善君と、今の三善君を具体的に比較してみよう。まず、仕事。始めの頃はただただ一生懸命だった。仕事に没頭していた。板谷さんを敬愛していた。働く喜びが

あつた。で、今はどうだい？ 要領を掴んで、代わりに喜びをなくしてしまったのではないかな？」

まあ食え、と私は三善君にもサラミを勧めた。

「た、確かに、も、も、物足りん。喜び、ない。でも僕『J』の字、読み取れんの、板谷さんのよに。悔しい」

「悔しい？」

「うん。し、し、しつかりなりたいん。僕も、い、板谷さんみたいに」

「そうか、やつぱり大事なのは『しつかり』かあ。で、他には何かある？」

「じ、時間、過ぎてくんが、悲しい。勉強できたら、なあ、思う。でででも、働かんと『デリバズ』おられん。お金ももらえん、だから僕、働く」

「しぶしぶ？」

「うん」

「みんなが三善君の暗い表情を見て心配していたの、知ってる？」

そう言うと、三善君の表情が二、三秒固まった。

「し、し、し、知らんよお！、そんなん。ええ？ うそ？ ちょ、ちょ、ちよつと、それ、も、も、申し訳ない、ごめん、みんなに。……そ、そして、ありがたい、嬉しい、本当に。とと、とても嬉

しい。見捨てられてないんだ、こ、こんな僕なのに、なんで？」三善君は興奮した様子でそう言った。

「そんな職場で働くのに、喜びがないのは不思議じゃないかい？」

「ぼぼ、僕、人の心、分かる、すごいへた。見捨てられる、怖い、それだけ」

「まったく、あの親のせいだな。親が死んだら墓石を蹴飛ばしてしまえ。あはは」

サラミがなくなつたので、私は席を立つて、冷蔵庫から新しいサラミを出し、包丁で切つて皿に出した。そして、サラミばかりで悪いな、と三善君に再度勧めた。

「みんないい奴らだつて、最初に私が保証したじゃないか。彼らは世の中の大半を占める、悪意のない人たちだ。もちろん少しはあるだろうけど、根はいい連中だ。三善君を見捨てるのは人間のくずだけだ。安心しなよ」

「うん。努力してみる」

「次に、私の大好きなキャッチボールだ。あれは二年前からずっと続いていたけど、お互いにとつていいストレス解消になつていたと思うんだ。しかし今では三善君がやめてしまい、キャッチボールはなくなつてしまった。そして三善君は勉強をし、私は何もしない。どうだい、キャッチボールをやめるだけの価値のある勉強ができているかい？」

「空いた時間短いから、え、え、英単語やつとる。一日十語」

「じゃあ、やめる価値があったわけだ」

「で、でも、すぐ忘れる。それと、価値、問題、違う」

「違う？」

「べ、勉強しとらんと、おかしくなりそう。今の自分、絶対おかしい。おかしい、分かるけど、しないと、昔のこと、どんどん湧いてくる。湧いてくると、悔しくなる、憎くなる、泣きたくなる。

勉強、それ抑える」そう言う三善君の目が潤んできた。

「キャッチボールが楽しいか楽しくないかの話じゃないんだね」

「うん。べ、勉強は、み、み、未来のこと。昔じゃない」

「なるほど、勉強は未来を見つめることか」

「うん」

「分かった。昔のことで苦しむ三善君を見るのは私も辛い。キャッチボールは我慢することにする

よ」

「ご、ごめん」

「謝ることはない。三善君は正しいのだから」

「あいがとう」

「しかしだ、夜の勉強はいくら何でもやり過ぎだ。学校に行っていた時は嫌なことばかりで、夜は

そんな話をしたり、気晴らしに漫画を読んだりしていたよな。そしてちゃんと夜は寝ていた。模範的な若者の暮らした。それが今はどうだ。勉強することに依存しきつている。これって依存だよな？ また倒れるぞ」

「べ、勉強する、あ、頭に入らない、何も。で、でも、き、き、気持ちいいんよ。……まるで、ね、自分、正しいことしている気、するんよ。自分、正しい人のような気、するんよ。自分に迷い、ないような、自分に恨み、ないような、ざまーみろつて、見返してるような、ちつとだけ偉くなったような、ちつとだけ強くなったような、そ、そして、みんなから受け入れてもらえるような、そんな気、するんよ、勉強してると。……と、と、とつても強く。ぎゅうつと。もう、まっすぐ、どどど真ん中に、正しい道、行ってるような気が。……でもそれ、ぜんぶ気のせい、分かってる。分かってるけど、や、止められん。勉強しても、だ、誰も怒らんから。怒ったの、あ、甘利さん、初めて。べ、勉強のしすぎ、自分、気付かんかった。本当。嵌まり込んでた。どんだんにせものになつてた。気のせいだけの人になつてた。……抜け出したいんよ。そ、そして、しつかりした人になりたいんよ。で、でも自分、人を信じる力、ない。ないないない、全然ないんよ。どこにもないんよ。教科書よりも人を信じること、できんのよ。自分、絶対頭おかしいんよ」潤んでいた三善君の目からとうとう涙が溢れた。

「もういいよ、よく話してくれた。ありがとう。三善君はもつと自分に自信を持つていいよ。もつ

と下らない人間になっていいよ。もつと無力な人間になっていいよ。誰も三善君を見捨てたりはしないから。だから、せめて夜は早く寝よう。これは私からのたつたひとつのお願いだ」
三善君は小さく頷いた。まるで小さな子供のように。

* 悪夢

ひどい夢を見た。

ある晴れた日、私は姉の遺骨を持って、島に向かう高速船を待っていた。島にある墓に遺骨を納めるためだ。船着き場の近くでは、三善君と斎藤が熱心にピッチング練習をしていた。ボールとミットがぶつかり合い、乾いた破裂音がゆるやかな潮風に拡散する。なぜか関係者はその三人だけで、姉の夫すらもいなかったが、特に不思議には思わなかった。

埠頭には釣り客が多かった。私は暇だったので、ぶらぶらと釣れ具合を見て回った。みんな大して釣れてはいなかった。ある釣り客は私に話してくれた。

「釣り道具はそのホテルで貸してくれます。はつきり言って高いです。ですが、もし大物が釣れ

ると、ホテルのレストランで釣れた魚を無料で捌いて刺身にして出してくれるんです。だからみんなあのホテルから釣り道具を借りているんです」

大物が釣れるといいですね、と私は言った。つまりはこのレストランの人、暇なのだ。

私と同じように釣り客に声をかけて回っている人物がいた。顔が日陰の土のような色をした五〇代くらいの男だ。その尋常でない顔色からして、恐らくは重度の肝硬変か末期の肝臓ガンなのだろう、そして平気で歩いているということは、きっとモルヒネを相当打っているのだろう。そんな彼にとつて、このささやかな散歩が彼の今の生活の全てであり、生き甲斐であるのだろう。残りは全部闘病だ。

その彼が私に声をかけてきた。

「船を待っているんですな」

「ええ、でも全然来ないんですよ」

「船なんか来ませんよ。ふふふ」

そう言い残すと、彼はまた歩いて行つた。

しかし、ちゃんと船は来た。小さな船だった。私は遺骨を持って乗り込んだ。

三善君がなかなか乗ってこない。

「もうすぐ出発です」という係員の声に、私は「すみません、ちょっと待って下さい」と言つて

船外に出た。

三善君の姿はなかった。相手をしていた斎藤も。

私は近くの釣り客らに「ここでピッチング練習をしていた男二人がどこに行つたか、ご存じないですか？」と訊いて回つた。

「そんな人、最初からいませんでしたよ、ねえ」

「ええ」

私は何がどうなっているのか分からなくなった。

「お客さーん、出発しますよー」

私はどうすべきなのか？ 一人で島へ渡るべきなのか、引き返すべきなのか？

そこで目が覚めた。

夢の中でも予感があった。目を離した隙に三善君はいなくなつてしまい、私は取り残されてしまふ、と。そして、現実でもそう変わりはない。途中からは明晰夢に近かつた。

そう、今の三善君は、今にも消えてしまいそうな印象なのだ。

* バランスの喪失

「口内炎がひどいんだ。ぶちぶちが四つもある」と私は美咲に言った。我々は今週も「ミラ」の一号店でローズヒップのブレンドティーを飲んでいる。

「ちゃんと食べてる？ 栄養偏ってない？」

「ああ」

「昨日の夜は何を食べた？」

「あじの干物、しらす、キャベツとマッシュルームのサラダ、わかめの味噌汁、ナスの漬け物、カボチャの煮物、発芽玄米、サラミ」

「なにそれ、健康的すぎ。サラミがちよつと余計だけど。んー、じゃあ、ストレスが原因なんじゃないかな。なんか顔つきがノイローゼっぽいし。目の周りとか」

「そうか？、そうか」

「なに一人で納得してるのよ」美咲は軽く笑って言った。

「美咲はさあ、これまで自分の歩んできた道に疑問を持ったことって、ある？」

「そりゃあ、小さいことは無数にあるけどね、でも大筋ではないな。いつも後悔しないようにって考えてきたから」

「そうだろうな、そうでなきや僅かなお金から美容院を二つも作れないよな、まったく、実業家の見本だよ、客観的な視点でプランの可否を判断し、私情は一切加えない、決断にあたっては非情になりきる」

「どうしたのよ一体？」

「自分が今まで歩んできた道が大間違이었다って、今更ながらに後悔しているんだ」そう言うと、私は力なく笑った。

「どういうふうに？」

「多分美咲には幼稚すぎて笑ってしまうと思うよ。子供の頃だけどき、私は将来たくさんの方々に囲まれてワイワイ過ごしたいなって思っていたんだ」

「あはは、ワイワイだつて。で、そこから一番縁遠い人になっちゃったわけだ」

「一匹狼がかっこいいって成人してからはずっと思ってたんだ。でも、それは自分へのごまかしだったつてことに最近ようやく気付かされた。そして、根は子供の頃から何にも変わってなかった。そのことを三〇年越しぐらいで再確認したんだ。ストイックに生きてきたつもりの方が、急にしたのみじめで怪びしい男に思えてきたんだ」

「ワイワイしたいの？ 銈介がワイワイする姿って想像できないなあ」美咲は努めて話を明るく向う方へ持っていくようにしているのが私にはよく分かった。

「美咲がワイワイする姿は容易に想像できる」

「そう？」

「そうだと、日々一生懸命生きている人たちが、互いの苦勞を理解し合う中で生まれてくる温かいユーモアに包まれた空間——それがそうさ。でも自分にはそういうものが一切ない。別にワイワイしたいわけじゃなくて、単に私には友達がいらないんだよ。色々と深いことまで語り合えるような、そんな友人。人を大事にすることを二〇年もないがしろにしてきたつけがここで来たんだ」

私はハーブティーをすすった。

「ごめんよ、暗い話で」

「今からでも遅くないよ。銚介はいい人だから、地道に人を敬っていけば、必ずいい親友ができるって」

「私は今すぐ欲しいんだ。だから参ってるんだ。都合が良すぎるのはよく分かる、無理なものもよく分かる、でも今すぐ必要なんだ」

「何かあったの？」

「笑ってくれ。好むと好まざるとに拘わらず、今の私の精神状態は三善君のそれと完全にリンクしてしまっているんだ。三善君が動揺すれば私も動揺し、悲しくなれば私も悲しくなる。そして今、三善君の精神状態はとても不安定なんだ。だから私の精神状態もグラグラしている。しつかり者の

美咲には分からないだろうけど、私はもうへとへとなんだ。だから、もし自分の腹のうちを分かってくれる友達が側にいたら、きつと心が軽くなるのになあ、と思つたんだ。切に」

「あたしじゃ駄目つてことね。ちよつと失礼じゃない？ あたしだつて落ち込む時はありますよーだ」

「弱音を吐く美咲を、私は見たことがない」

我々はぬるくなつたハーブティーをすすつた。

「よしましょ、せつかくの火曜日にケンカはしたくないし」

「悪かつた」

「耐えるのよ」美咲はそう言つて私の手を握つた。

「え？」

「苦しい時こそ、耐えるのよ。いい？」

「そうか、耐える、ね。うん、その通りだ。よし、私は耐えてみせるよ。三善君のためにも。美咲、素晴らしい言葉ありがとう」

「そして、もし銈介が耐えられなくなつたら、銈介の亡くなつたお姉さんのことを思い出して。お姉さんの旦那さんとお話するのもいいかもしれない」

「いい助言をありがとう。やばくなつたらそうさせてもらうよ。で、ひとつ質問してもいいか

な？」

「ええ、どうぞ」

「仕事なんかで用事ができた時、それを無視することはできる？」

「また突然、唐突な質問ね。無視なんてあり得ないよ。信用にかかわるもの。逆に、用事を着々とこなすことこそが私の存在理由でもあるの。働くって、そういうもんじゃないかなあ？ 仕事に限らず、遊びでもなんでも、そうやってパーツを少しずつ積み上げることで、時にみんなまで目的意識を共有し、何かを創り上げる、時に心の誤解を解き、夢や悩みを分かち合う。喜びもその積み重ねから生まれるものだ」とあたしは思うけど。だからどんなに小さな用事でも無視はあり得ない」

「やっぱりね。ありがとう」

「何が訊きたかったの？」

「うーん、自分でもよく分からないんだ」と私はごまかした。

「ふうん。で、今晚も粥のお店？」

「三善君が楽しみにしているんだ」

「あなたもでしょ。毎週毎週、よく飽きないねえ」

「美咲もまんざらじゃないって感じだけど」

「でも、いまいち華がないのよねえ、あのお店」

* 「ほんとう」の島へ

あの感情的な話し合いの日以来、三善君は夜十二時前に私と同時に眠るようになった。私が「寝る時間だよ」と言うと、三善君は自室に入り、電気を消す。それを確認して、私も自室で眠る。

しかし、私がトイレに起きたある日のことだ。深夜四時頃だった。あろうことか、三善君の部屋から明かりが漏れていたのだ。そしてシャープペンシルのカリカリという音。

私は不気味に思ったが、できるだけさりげなさを装って、三善君の部屋の扉をノックした。すぐに扉が開くと、そこにはぼつの悪そうな顔をした三善君が立っていた。私は努めてにこやかに言った。

「眠れなかったのかい」

「うん」

「眠れない日はよくあるのかい」

「うん」

「もう四時だよ、眠れなくても、とりあえず横になろうよ」

「うん」

「じゃあ、おやすみ」

そう言つて、私は扉を静かに閉めた。しばらくすると、三善君の部屋の明かりが消えた。

三善君の勉強依存は克服できていなかったのだ。私は少なからずショックを受け、気分が重く沈んだ。勉強依存の重症ぶりも思い知らされた。

次の日の夜から、私は寝る前に水をたっぷり飲んで、夜中にトイレに起きられるようにした。するとだいたい三時か四時に、毎晩尿意で目が覚めるようになった。その時、三善君の部屋の明かりは消えている日もあつたが、点いている日の方がずっと多かつた。静寂の中、カリカリという音だけがする。病的な音だ。しかし私はドア越しに「ほどほどにしろよ」と軽い調子で言うだけにして、敢えて話し合いの場を設けることはしなかつた。

これは三善君にとつて自分との戦いなのだ。それが私にはよく分かる。自分のことのようにありありとよく分かる。

虫けらのような連中から吃音を馬鹿にされ揶揄される三善君は、三善君のことを相談できる友達もいない惨め極まる私の姿だ。正しいことをしたいと思つている三善君は、何とか三善君の力になりたいと思つている私の姿だ。正しい人でありたいと願う三善君は、三善君に説教しその見本を見

せようと奮闘する私の姿だ。三善君の迷いは私の迷い、三善君の恨みは私の恨みに通じている。そして、そんな三善君に依存しきつた私を、一体どこの誰が受け入れてくれるというのだろうか？ みんな見捨てないでいてくれるとでもいうのだろうか？ 事実、私はこのことを美咲以外の誰からもひた隠しにしている。

見捨てられることに対する三善君の恐怖はただならぬものがあるが、私も姉の一件でその怖さの片鱗を思い知らされた。辛いことだった。私だって見捨てられたくはない。だから三善君の心情はよく分かる。しかし、憎悪と暴力、それに伴う心の痛みと悲しみ、挫折感——そんなものが今の三善君を絶えず襲い、それらは束になつて見捨てられる恐怖へと三善君を押しやつているのだ。凄惨な光景だ。その残酷さは私をも悩ませている。だが、眠れるだけ私は遙かに恵まれているのだ。

私は深夜の観察を一ヶ月ほど続けたが、三善君の勉強依存は治まる気配がなかった。きつと、彼の中の毒は心がけなんかで抑えられるような生やさしいものではないのだろう。三善君は涙ながらに「抜け出したい」と訴えていたが、それほどまでに彼の中の毒は手強いのだろう。だから、安上がりな正しさを求めて誰もが嫌がる勉強に逃れざるを得ないのだ。それも悪いこと、その場しのぎのことだと分かった上で。

その間、敢えて何も言わずにいるのは、私にとって非常に辛いことだった。私は本当は、自分の

手で三善君を勉強依存から助け出したかった。しかしそれでは三善君を助けたことにはならない。美咲が私に友達をひよいとあてがうようなものだ。これは三善君自身が克服しなければ意味がないのだ。分かっている。

だが、克服するめどがまるで立たない今、私はどうすべきなのか？ これを考え始めると頭が真っ白になってしまう。そして三善君は日に日に元気をなくしていく。私はどうすることもできない。私は自分の無力さに腹が立ち、情けなくなる。

それとは別に、ここまで直情的になれる三善君が、私は羨ましくもあつた。凝り固まった中年の私にはとても真似のできないことだ。どん底まで落ちてしまうのが怖い、というか、まずいと感じてしまう。そこで、いつだって生活や仕事を言い訳にしてきた。そんなことをしたら、生活が、仕事が多々。そして今だってそうだ。三善君のことで頭をいっぱいにし、自分のことを頭から叩き出している。そして冷静を装って人の心配ばかりしている。まるでペテン師だ。

そのペテン師は皮肉にも、「ほんとう」にとっても飢えている。「ほんとう」の感情、「ほんとう」の思い、「ほんとう」の生命の営み。私の心の芯に触れるもの全て。

しかし見回す限り、私のまわりは虚飾ばかりなのだ。心の芯に掠りもしない。三善君ですら嘘に食われかけている。美咲は嘘や「ほんとう」とかとは関係のない別のルールに則った生き方をしてる。そして職場には「ほんとう」はない。職場に「ほんとう」の人間の付き合いを持ち込むと、

職場が成り立たなくなるからだ。当然だ。私も職場ではにせものの姿で過ごしている。しかし家に帰ってからもずっと、寝て起きて職場に行くまでずっと、私はにせものの姿のままなのだ。直らないのだ。直せないのだ。顔から剥がれない呪いの能面のように。そう、「ほんとう」を希求する私が最も「ほんとう」から離れているのだ。きつと「デリバーズ」の連中は「ほんとう」の姿を持っている。ただただ羨ましい。

私はきつと声を上げて思い切り泣きたいのだと思う。赤ん坊のように。そして傍らで一緒に泣いてくれる友が欲しいのだ。あるいは私は大声で笑いたいのだと思う。馬鹿騒ぎみたい。そして傍らで一緒に笑ってくれる友が欲しいのだ。苦しみや葛藤を分かち合える友が、喜びや安らぎを分かち合える友が、そういう友が切に欲しいのだ。

しかし、私ができるような友を持つにふさわしい人物かと問われれば、答えは間違いなくノーだろう。二〇年も一人ぼっちでできた身だ。資質があるはずもない。子供じみたわがままと言われればそれまでだ。その間私も一人にすっかり適応してしまった。二〇年のつけはあまりに大きい。

いや、本当に欲しいのは友ではないのかもしれない。「ほんとう」に対峙する勇気がないだけなのかもしれない。自分が暴かれることに耐えられないような気がしているだけなのかもしれない。一人で泣けばいいじゃないか、一人で笑えばいいじゃないか、なにがそんなに辛いのか？ 寂しいだけなのか？ 空しいだけなのか？ そうじゃあるまい。常に包まれていたのだ。何かに。たと

えば「島」のようなものに。

しかし今回も「島」は私を気安く癒してはくれなかった。「島」の正体である三善君が依存のぬかるみに嵌まり込んでいっているからか？ただ、「島」と本物の三善君との間にはずれがある。「島」はいわば、現実の三善君の中に閉じ込められた三善君のエッセンスが形になったものだ。その三善君は本物の三善君とは別の「秩序」の中にいる。

「秩序」？

「秩序」に思い及んだところで、私にひとつのアイデアがふと浮かんだ。それは実に単純なこととで、どうして今まで気が付かなかったのか不思議なくらいのアイデアだ。

二人で本物の島へ行くのだ。

私は早速三善君を部屋から呼んだ。

「我々は本物の島へ行かなくてはいけないと思うんだ。

私は三善君が勉強に依存している姿を非難したりはしない。三善君の受けてきた暗い過去が暴れ回るのを、一時的にせよ封じ込めるためにやむを得ずしているんだと思っている。三善君が過去どんな傷を受けてきたのか全然知らない私に、非難なんかとてもできない。

けどね、それを一生続けるわけにはいかないし、そんなことをしていたら三善君は疲労で死んで

しまう。それに、私も見ていて自分のことのように辛いんだ。

じゃあ、どうすればいいのか？ そのことは三善君も考えていたと思うけど、実は私もずっと考えていたんだ。この勉強依存の解決が難しいのは、三善君自身が自分の暗い過去をやっつけないと、問題の解決にならないところにあるんだ、それは分かるだろう？」

「うん」

「そこで『秩序』に気が付いたんだ。『秩序』が生まれたから、過去の記憶が暴れ始めたんだと。正常でいられなくなつたと。そうだよな」

「うん」

「じゃあ、この『秩序』には三善君にとつて問題があるつてことにならないかな。つまり今の三善君の『秩序』には遅しがないんだ。すぐに三善君を壊してしまいそうなんだ。以前二人で話した時に、職場のみんなが三善君のことを心配している、と私が言つて、三善君はひどく動揺し、そしてとても喜んだよね。それは裏を返せば、自分はいつ見捨てられるか分からないつてずっと思つていたことになる。そうなのかな？」

「うん」

「そんな貧弱な『秩序』の中では普通に暮らすことはできない。「勉強」のようなでまかせの権威に溺れていないと生きていけなくなる。だから、三善君の『秩序』に膨らみと深み、遅しさを持た

せることがいま何よりも必要なんだ。盤石な『秩序』を手に入れるんだ。すると、もし過去の記憶がちよつとやそつと暴れ出しても『秩序』は揺らぐことがないし、三善君もぐつすり眠ることができ。そのためにも、我々は別の秩序に触れる必要があると思うんだ。そしてそれは島にある、と私は確信している。それも小さな島に」

「な、なぜ、島？」

「島にはコンパクトで分かりやすい、そして力強い原初を思わせる秩序があると私は思っている。まず秩序の質が違う。陸の秩序の根幹は資本主義、つまりお金だ。そこには欲望が組み込まれている。そして臭いものにはことごとく蓋がしてある。しかし島の秩序には欲望がない。そして何でも剥き出しだ。お金なんかは二の次で、その代わりに、みんな協力しないと生きていけないから、連帯感が大前提になる。あなたと私は繋がっている、ということが何よりも大事なんだ。それはとても遅しい肉体的な秩序だと思う。」

それに第一、島は狭い。島民は体を寄せ合うように暮らしている。だからみんな隣近所のことを詳細に知っている。悪く言えば相互牽制、よく言えば一体感。よそ者は徹底してよそ者だ。だが、よそ者も含めて一体なんだ。それが島のルール、掟なんだ。

そんな島暮らしの生活には、陸のようなきらびやかな刺激はない。基本的に毎日が平穏なルーチンワークだ。しかし自然は時に恐ろしさを露わにし、なのに嵐から自分達の暮らしを守る術は極め

て限られている。頼りになるのは人間の知恵だけだ。こんなリアルな刺激は安全が手厚く守られた陸ではそうそうお目にかかれない。平穏な島暮らしの陰にはそんな自然との格闘が秘められているんだ。遅しいじゃないか。

そして、職のない島からは若者達がやむを得ず去って行く。逆に老人達は島に根が生えている。島の秩序の主役は老人達だ。もちろん老人達はみな島を愛している。島の暮らしを誇りに思っている。誇り——これは若者が主役の陸の秩序にはない特質だと思う。三善君の今の『秩序』にもないと思う。

そんな荒削りで異質な秩序に少し触れるだけでも、それをきっかけにして三善君の『秩序』は遅しくなれると私は思うんだ。どうだろう？」

いま私が三善君に語ったことは、私の中の「島」のイメージでもある。そして、それは「ほんとう」の三善君の姿でもある、と私は思っている。

「行ってみないかい？」

「うん」

「めばしい島はいくつか見当がついている。どこに行くかを一緒に決めよう」

恥ずかしくて三善君には言わなかったが、もちろん私の中にも本物の島へ行かなくてはならない

理由があった。

職場、美咲、自宅——その中で流されるように、ピンボールの玉のように相手任せで動いている自分がある。ましてやそこに幸せや充実といった感情まで感じてしまう有様だ。ふと我に返り、その時の自分を思い起こすと感じるのは、いい気にさせられ、巧妙に騙され、自分の中から自分の肝が抜きとられて、剥製のようにならんとさせられてしまったような、一体何やってんだろう、という気分だ。そこには私の憧れる「ほんとう」はもちろんない。がらんとする空間は「ほんとう」っぽい嘘の幻像でいっぱいだ。

かといって、現実の日々の活動から生み出される感情に代わる何か、「ほんとう」の何かがあるか、それが現実に転がっているのか、そんなことは分からない。しかし私は、諦めるより賭けてみたい。その微かな心配でも。それは子供の頃の記憶にあるような気がする。三善君を見るとそんな気がする。私だって、あの頃は心を許せる友達がたくさんいたのだ。

小さな島へ行き、馴染んでしまった安っぽい出来合いの感情を捨て、島の秩序に身を委ねてみた。懸命に、悔いのないように。そうすると、陸の上の世界で失った、がらんとしたのではない、実の詰まった「ほんとう」の自分を獲得できるかもしれない。するとどうなるだろう。怖い気もする。後悔に激しく押し潰されてしまうかもしれない。

三善君も怖いだろうか？ まだ彼には分からないかもしれない。「ほんとう」の自分に対面でき

るかもしれない、ということがどういふことなのか。彼は年齢こそ若い、同年代の人々よりも遙かに多くのものを失つてきたはずだ。しかし彼には広大な未来がある。可能性がある。私とは違う。きつと上手くやつてくれるはずだ。

つまり、我々は「島」そのものになりたいのだ。三善君がいつか言つたように。

三善君の「秩序」が遅しくなり、今の自分が何者かが分かるようになると、恐らく三善君の吃音は治るのでは、と私は思っている。そうなつたら私を包む「島」は多分きれいに消えてしまうだろう。そして雑談ができなかつたこの二年分、剥き出しになつた二人で下らないことをあれこれと話してみたい。

たとえばかつて「島」があつたことを。